女鑑

月二十四日發行

第百六號

東京國光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第百六號

目録

奈良義成の妹



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

風俗の改善

風俗の改善。風俗の改善。風俗の改善とは、實に重大なる事柄なり。言ふものは、常に輙く之を言ふ。然れども、其の實行に至りては、決して易々にあらず。もしこの事をして易々ならしめば、風俗は、萬古汚隆の變を見ることなかるべし。其の然ること能はざるものは、蓋かならず故あることならずや。

いつの世にありても、みな風俗の善美ならんことをねがはざるはあらじ。然るに、美風良俗の常に久しきを保ちがたきものは、蓋其の事の至難なる理由あるによれるにあらずや。

人々誰かは、其の身の修まり、名の芳しきをねがはざるものあらん、然るに、其の榮名をして常に完からしむること難きは、何ぞ、蓋其の利己の欲心に克ち得ること能はざるの故によるにあらずや。

人はまことに、この欲心を節制する道を知らざるべからず、これを制すること能は

ざれば、萬事皆障害を來すを免るべからず。あゝ、この欲心こそ、實は風俗を混濁ならしむる主因にはありけれ。

世人は、この進み行く世の有樣を見て、常に得意顔にも、開明々々と叫びのゝじれども、その實、甚憂ふべきもののあるを知らず。人情の日に月にかはりもて行きつゝ、忠信を以て迂陋と爲し、誠實を以て愚直と爲し、奇智はあらざれば、時世に適はずといひ、狡佞にあらざれば、實用に疎しとするに至れる程なれば、世の風の下り、俗の卑くなれるは、いふもさらなり。はたいつの世にかは、正しき道にかへりぬることやらんといと慨し。

形式上より見れば、今日の世の中は、實に進みたり。開けたり。猶も、進み行くべく、開け行くべし。吾人は、決して、然らじといはじ。又、之を悦ばずといはじ。たゞ、この進み開る世の風俗をして、いよ〳〵善美の極にいたらしめん事を願ひ望むなりけり。

世道の下り行くとは、人の形の變化するにもあらず、天地日月のありさまの變化するはもあらず、たゞ人の心樣のあしくなりゆくなりけり。この人の心樣のあしくなりゆくは、教育によりて匡救すべきことなれども、その基本たる家庭の訓誨如何に

よりては、教育の功を奏すること實に難し。

ある人は、いへらく、「一人一家の家庭、いづくんぞ一國の風俗の汚隆に關せんや。」と、これ一應は尤なる論の如く聞ゆれども、其の實は、未深く考へざるものならん。すべて、國家の本は、一人にあり。一人の其の行を愼むものを積みて幾千萬人に至り、一鄕より、一國に達せば、これまことに善美の一國となるべし。されば、全善完美の一國家を作らんと思はゞ、かならず、一人一家の風俗を正しくせざるべからず、一人一家の風俗を正しくせんと思はゞかならず、その家庭の風規を嚴にし、親情を厚うせざるべからず。この重任を負擔すべきものは、それはた誰ぞ。それはた誰ぞ。一家かならず、家主家長ありて、之を統轄するはいふまでもなし。されど、家長を助けて家政を處理するものは、主婦の責務なり。されば、いかにしてかは、一家の子弟宗族をして、淳良の俗をなさしむる重任の一分を負擔せざるを得べき。

婦人、家庭にありて、既に此の重任あり。故に、常に世上の風俗を觀察せんことを要すべし。人の物品を借りて之をかへさゞるもの、人を欺き詐りて、己の欲を充すもの、利の爲に父母兄弟に辱をあたふるもの、人を殺して己を利せんとするもの、

その他は、勝て數ふべからざる程なり。かゝるたぐひの多きと少きは、實に人の心のあつきと否とによることにして、とりもなほさず、風俗の美惡に關係するものなり。

「貧の盜み」などいふ諺もあれど、人の心をひがめ情少くなるは、あながち貧によるものにもあらず、その教導化育の如何によりては、善良の性の發達して、いかなる貧苦を極むとも自身の心より、自然に惡き事をいみ畏れてなさゞる樣に成者なれば、一時の出來心などの生ぜぬ樣豫防するは、教育者、及家庭教育者の務なりとやいはまし。今日の我が國は、よろづ足らはぬこともなく、物事みな進み行く中に、風俗のしかも、みだれまたるは、いひ出でんもあさまし。吾人は、いかでこれを改めて、善きよりも善きにせまほしと思ふ心の切なるまゝ、その責ある諸孃の一考を促すになん。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



女子と學藝（一）

雨後翠江

序論（一）

學藝といふは、修身道德の學問よりはじめて、文學、理學、すべて世にいふ百般の學問と、書畫、裁縫の技藝よりはじめて、歌舞音樂挿花茶の湯に至るまで、世にいふ百般の技藝とをいふなり。而して、此處に、おのれが論はむと思ふことは、かゝる百般の學問技藝の中にて、いかなるものが、女子の學問技藝の、最も本たるものにして、いかなるが、これに次ぎ、いかなるものが、最も末なるかをいはむとするなり。即ち、語をかへていはゞ、百般の學問技藝の中にていかなるものが、女子に最も大切にして、いかなるが、これに次ぎ、いかなるものが、最も必要少きかを論はむとするなり。なほ、語をかへていふ時は、世の中の百般の學問技藝の中にて、いかなるものは、第一に必ず學び脩むべし、いかなるものは、ひまあらむにて、必ずともいはず。いかなるものは、學び脩めずともよからむといふことを論ひ定めむと思ふなり。女子にも、もとより、學問技藝の必要なるものゝある事は、前號の卷のはじめにもいひたれど、それを、今更にいはむとはせざるなり。

さて、この事を論ひ定めむには、まづ、女子といふものは、いかなるべき者なるか。女子は、世の中に、いかにあるべきものなるか。女子は、如何なる身分の者なるか。女子は、何を本分とすべきものなるか。まことに女子の本分といふものより、はじめに論ひ定め

ざるべからず。女子の身分のいかなるものなるかといふ本の定まらでは、女子の身に、如何なるものこそ、第一に大切に必要にあるべけれといふ末の論ひは論ひ定めがたきなり。いかなるものなるか、物の定まらずしては、いづれかそれに適、不適、相應、不相應せるものなるは論ひ判ち難けれどなり。

さて、女子は、如何なるものなるか。國家に社會に如何なる義務を有てる者なるか。國家に社會に對して、何を女子の盡すべき本分とすべきか。如何なる義務を盡くし、如何なる本分を有たど、國家に社會に、よく眞誠の女子たる本分をも義務をも、守りも盡くしもしたる眞誠の女子たるを得るか。大君を敬ひまめやかに仕へんことは、それは、ひとり女子の本分のみにはあらず。男子とても、同じなり。我國の人といふものゝ本分なれど、人ならど、殊更に女子にのみいふべきものならず。父を尊み母にやさしうするは、それはた、ひとり女子のみの守るべく盡くすべき本分にはあらず。男子とても、それは一つなり。それは、おしなべて、我國の人として、かねても守りも盡くしもすべき本分なり。兄弟にまめやかに、朋友に誠あるべきも、また然り。それらは、女子のみにいふべきことにはあらず、我國の人といふ人は、皆守るべく盡くすべき本分や義務なり。さる忠孝信義は、もとよりなり。しかも、おのれは、女子が、殊に女子として守るべく盡くすべき義務も本分もありとこそ思ふなれ。

世には、にこ草、しこ草、さま〳〵なる言の葉もおひしげれど、男も女も異る事あるべからず、いな異る所あらずとて、男女の間の區別を、萬に嫌ひ廢せむと爲す人あれど、おのれは、さる説に従ふこと能はざるなり。おのれは、極めて區別を置かむと欲するものなり。おのれは、極めて區別あらざるべからずと爲すなり。いな、おのれは、極めて區別ありと思ふなり。區別あ

りとて、優劣あるにあらず。なほ、天地の如し。天、たかしとて、地に優れりといふべからず、地低くしとて、天に劣りたりといふべからず。男女の差も、是れなり。差別と優劣とを同うすべからず。區別あれど、必ず優劣ありと思ふより、男女を同一ならしめむとするやうなる不道理の說も起るにこそ。異れるが中にも、優劣をいふべからざるあり。同じきが中にも、優劣あるにあらずや。

男女の間には、生理上に、もと自然に異る所ある事は、今更に云はじ。現に、社會を見わたすに、男女の間は、其の性質の上に、其の事業の上に、現に著しき區別あるにあらずや。此の著き區別あるは、固有のものにあらずといふもよし。かゝる著しき區別をつくるに至りたるは、即ち、社會が、社會の保存上の必要によりて、自らかく區別をつくり來たりたるなり。社會の事物といふものは、常に社會を保存すべき道にむかひて、變りもうつりも進みも爲しゆくものにて、社會を保存すべき道に逆うて、變りも動きも爲しゆく事は稀れなり。而して、たま／＼さるものあるも、それは、一時にすぎず、久しくは殘らず。やがて、世の中に見えずなりゆく。世に久しくうちつゞくものは、皆、世に必要なるもののみなり。世の中は、自ら世の中を保存しゆく道に進みゆくものなり。されど、男女の間の、太古よりいやます／＼に別れ來て、現に今の如き異れるけぢめを見るに至りしは、これまた偶然の事ならむや。かくても男女の間は、性質に、事業に、本分に、自ら區別あるべき必要は、見るを得む。

しかのみならず、最たやすく其の必要を見るべきは、分業といふ點より見ても、區別ありたきなり。社會に分業といふことの功能の著しきことは、人々のよく知ることならむ。世に分業といふこと行はれ、人々、各、業を分ち、心を自家の一業一藝一事に潛めて、互に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の一事一業に從ひ勵むもの故に、世の中の百般の事業は、ます／＼巧みに、ます／＼妙へに、いよ／＼うつくしう進歩しゆくなり。さなくて、一人にして、百般の事業を取らむ、人は、神にあらず、佛にあらず、萬能にあらず、萬知にあらず。いかで、百般の事にわたり、百種の業にわたりて、皆よく堪能なるを得むや。いかでか百般の道にわたりて、よくゆきつくし、ゆきいたるを得むや、分業といふこと行はれ、一人に一所に自ら適せる一事一業をいとなめむころ、世の中の百事百物、皆よくうつくしくも巧みにもなりゆけるなり。これを、今、男女が相關係して、一家を整へ、一國に盡くす道の上にひき來らむ如何、男女、各、その自巳の身体に性質に本分に適應せる方向を取り、相別れ相倚り相勵み相助けてゆかむこそ、一家の間の事業も自ら美しく、國に君に對する義務も、自ら美しく優ることを得め。なれむ、おのれは、男女の間に、區別あるをよろこぶものなり。これは一般の必要上より、男女の間の區別あるべきを論せるなり。さて、これより、女子の本分の如何なるものなるかをいひて、而して、ます／＼男子と異る所あるを論じ、さて、これに適せる學藝の順序をのべむ。

（未完）

女子教育一班（十五）

三輪田　眞佐子

やけ野のきゞす、夜の鶴實に子をおもはぬものぞなき、維新前までの女子は、今日のごとく教師につきて道を聞き藝を學ぶもの少かりけれむ、實際に良妻賢母となる資格を具へしことは、をさ／＼今の女子に勝らんも劣るまじ。そはその母自ら師を兼ねしに由りけん。思ふに親むかり子の身の上をおもふものは他にあらじ。故に呱々の聲を聞きて、その兒の苦しむところを知り、蠢々の姿を見て、その兒の欲りするところを察し、つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ねに赤心もて鞠育せんことをのみ望み、既に長育すればその孃の露たりとも人より嘲弄せられざらんやう心を用ゐるものから、悉く覺え居る智識を授くるのみならず、なほ嫁がん後は舅姑によかれよかし、良人に愛せられんこともかな、と祈りつゝ女子の心得を逐一訓ふるに日も足らざるより、かくよき結果を得たりけん。蓋し今日の母とて孃の行末を案じ、夜な〳〵目をさますことも多かるべし。桃葉の蓁々たるを見るにつけ、心の動くことも少からざるべし。

さればかく敎育せられし女子は、その母を師とするをもてそが母より感化を受け、おのづから母と等しき人物となり得べし。故に古は女子の良否を定めんには、先づその家風を見たりき。卽母の性情を察しけらし。これぞ亦一種の學風なる。さかれども幸か不幸か、今日は社會の進步に伴ひ智識は廣を要するのみならず。家庭にも閑日月なきものから、女學校にその敎育を委ぬべき勢とはなりにけり。從ひて敎師の學風を尊ぶこと肝要とはなりぬ。

むかし顏淵喟然としてその師孔夫子を嘆賞して曰ひけらく、こを仰げばいよ〳〵高く、こを鑽れはいよ〳〵堅く、前にありと思へば將た後にありとぞ瞻ゆる。恆に循々として善く人を誘き、文もて我を博め、禮もて我を約しぬ。と勿論聖人に及ばざる限りの人には、斯く風采大德を望まんも難しとは言へども、苟も人の師となるものゝ典にこそあれ。もし單に一技一能に長ずるのみを以て、その節操及び德望なきもの、過ちて師たる尊き位を占めんか、風敎の行れ難きことさながら木により魚をもとめんが如し。わきて女子を敎育するものは極めて純潔なる人ならざるべからず。

元來男子にして女子の師たるものは、一般人類の道及び國民の務を敎へ、自ら模範となれば足りなんも、女子にして女子の師となるものは、女子特旨の本分につ

きてさへ、之が活くる模範となるべきなり。あはれ任重うして道遠いかな。故に女教師はほゞ左の如き資格を具へざるべからず。

先づ父母に事へ、良人に從ひ、將た人の母たる務を盡し、世人に對しても女子らしき体面を有ち、仰ぎて天に耻ぢず、俯して地に辱ぢざるものならざるべからず。もしかゝる女子の天職を躬行せずして、青年女子に道德を講ぜんか、誰か盜跖が道德を言ふと等しき思をなさゞらん。勿論師たる女子まだ若うして、人の母たる時期に達せざる人ならんも、かゝる天職を盡すに足る人物ならざるべからず。既に内に令德積らば、などか外に發せざらん。もし男子めきたる擧止をなして、女德を輕しめ、良人を得んには屈從の煩あり。兒女を育てんには朝夕の勞をまさん、など心得なすものあらば、如何ばかり學藝に妙ならんも、最早女子の師たる資格なきものぞかし。

次に女子の師は藝能にあらずして精神にあり。世にはまだきこの理を知るもの少なければにや、師を求むるに藝能を問ひ精神を糺すこと多からざめり。さて昔を思ひ今を鑑みること難からず。むかし小野の小町は歌學に堪能の女子なりけれど、その精神を探らば身のほどを忘れて、世を厭ひ、毫もほむべきところなきが如し。故に（すまのあまの浦こぐ舟のかぢをたえよるべなき身ぞかなしかりける）は小町の理想より寧實際の境界なりけん。之は文學の上より見んには、兎まれ角まれ、もし過ちて斯る種類の人を師と仰がんには青年女子の進路を妨ぐること少からず。思ふに青年女子には家族社會などに伴ふ生活てふ觀念を養はしむること必要なれば、浮世をかこつ思想を增さしめんより、世路の難に堪へしむる思想を起さしむべし。今日宗教的女子教育の國家及び家族のため、有爲の女子を作るに如何はしと言ふ人多きもこの理にや。さりとて虛飾も

て世を渡り虛榮もて慾を恣にせんとのみ謀る俗物は決して人の師たるに足らず。唯淸き心の女子尊き心の婦人こそ靑年女子の師となり得れ。

なほ女子も愛國の念慮を養ふべきこと、男子と撰ぶところなかるべし、本來女子は泰平の時には國風良惡の源となり、萬一の秋には國力强弱の基となるは喋々を待たじ。されどかゝる女子を敎育する敎師いかで愛國の心なかるべき。果して師たるもの愛國の情に富まんか、文學を講せんにも大和心の櫻と散りてしますら武夫の跡をほめ、地學を敎へんにも、國境を示して時理を明し、物產を說きて富源を悟し、有爲の女子を作ること難からず。强ち口頭もて政談をなすに及ばじ、陽春もとより是非を言はざれど、其の呴育に感ずらん、地塘の草おのづから萌出づるものぞかし。

まことや自ら女子の本分を實踐し、敎師に適當なる理想を懷き、國民の母たる愛國の心さへあれど、以て少年女子を敎育するに足らんも、學識なくんばなほ飽かぬ心地ぞする。凡そ學博からざるときは、その說一隅に偏するを免れず。識深からざるときは、勢、事理に暗きを以て、弟子に滿足を與ふること難く、從ひて師たる尊嚴を失ひ敎育の目的も水泡に歸せん。要するに以上の條々を完備したる人にあらざれど、もて女子の師となすに足らずかし。

幼稚園普及の一方法

一ッ橋幼稚園主　多田房之輔

幼稚保育の必要なること、幼稚園の普及擴張せざるべからざることは、敢て予が言を俟たざる所なれども、予が特にこれに說かざるを得ざる所以のものは他なし、我國に幼稚園の始めて設立せられしは、去明治九年の十一月にして、已に二十有余の星霜を經たるにもかゝはらず、其發達頗る不十分にして、學者敎育家の

保護奬勵を得ざるのみならず、却て害多くして功少なきものなり、などの評を招ぐるに至りしは、頗る遺憾に堪へざるなり、願ふに世上に幼稚園のことを是非するもの丶中にも、未た十分に之れが原理を研究せず、又深く經驗を積まざるものなきにあらず、否其過半は俗に所謂食はず嫌ひの徒のみ。か丶る徒をして猥りに喙を我が保育事業の上に容れしめ、併せて世上に十分の信用を得て完全なる發達をなさしめざるは、果して何人の罪ぞや。蓋し當局者が冷淡なりしが爲めのみ。不熱心なりしが爲めのみ。若し予が言を咎むる人あらば、乞ふ何人が幼稚園の普及擴張に盡力せしか、其名を示されよ。予不幸にして未だ其人なりしを知らざるなり。

或人曰く、目下の急務とする所は、幼稚園に關係せる人々をして、今一層幼稚園のことを研究せしめ、よく幼稚保育の精神を悟らしめんことを勉むるにありと、予はこれに繼ぎて目下の急務は、世の學者幷に教育家をして、今少しく心を幼稚園事業に用ゐしめ、併せて世上一般の人々に幼稚保育の必要なる所以を知らしめんことを勉むるに在りて斷言せんとす。然而して甲の目的に對しては、既に保育法研究會フレベル會等を設けたりと雖も、乙法に至りては未だ良法を實施するを得ず。唯兩三年前より予が監理せる幼稚園内に『園話會なるものを設け、幼兒の父兄其他の有志を招きて、幼稚保育の實況を示し、且保育法の大要を講話し、更に其要旨を印刷に附して、之れを學區内に配布せり。左に記するものは其一なり。今之れを『女鑑』記者に謀りて、讀者諸君の閲覽を請はんとするは、敢て幼稚園の普及擴張に盡力を求めんが爲めなり、普及擴張上の良方法を敎示せられんが爲めなり。あはれ同感の兄弟姉妹諸君よ、斯道の爲め一臂の勞をな吝み給ひそ。

我が親愛なる幼兒の御兩親各位、こ丶に『園話會』

を設け本日各位の臨席を請ひたるは、主として保育の方法を改良し、各位が日々送らるゝところの親愛なる幼兒の幸福を進めんがためなり。抑保育の結果をして、完全ならしめんには、わが園に入り來れる幼兒の性質、慣習、及び躰軀の模樣等を詳にし以て適當なる方法を工夫し、徐々と之に應せざるべからざるは言ふ迄もなく、尚は本園が行ふところの保育の要旨、並びに方法に關して、親しく之れを幼兒の家庭に通告し、兩者互に力を合せ、成るべく家庭と幼稚園と同方向に進行し、同一の目的を以て幼兒を取扱はざるべからず。しかせんには時々幼兒の家族、即ち各位と本園職員と一室に相會し、懇ろに之れが談話をなす方法を立てざるべからず、これ予が園話會を設立したる所以なり。今や各位は微志のあるところを察せられ、御繁務をも厭はせられずして、斯く多數の來臨を辱うせしは予の頗る滿足に堪へざるところなり。就ては先づ保育の要旨につき聊か思ふところを述べ、次に幼稚園主任をして恩物の說明をなさしむる筈なれど、最後に至り各位は親しく保姆と共に愛兒のことに關して御懇話なされたし。尚は御疑ひのかどは遠慮なく御たゞしあらんことこそ望ましけれ。

一、敎育は生れて後直ちに始まるべきことと

敎育といへど小學校より始まるものとのみおもひて、我が子の學齡に達するまでは、深くも心をとめざるものあり、たとへ身は富有にくらし、萬に事かゝでありながら、其いとし子を敎なき乳母、または子守の手に委ねて省みざる人乏しからざるが如し。これ予の日頃ひそかに憂ひて止む能はざることぞかし。

西洋の敎育家リッテル氏は『敎育はいつより始むべ

きかといふに、人間出生の時より始むべきものなりといひ』、又バルン氏は『教育はいろはをしふるを以て教育の始めと思ふべからず。父母の言語動作兄弟姉妹の交情は皆教育にして赤子の時より既に教育は始まりつゝあるものなりといへり。』これ誠に動かざる名言なり。さては、兒童は學齢に達するまで、空しく棄ておくべからざるはいふまでもなく、滿三年に至りて幼稚園にいるゝとも尚足れりとすべからず。母の膝下に乳を求むる時、更に進みて胎内にやどりし折より、十分の心しらひす。

幼稚なる折は、事毎に感ずる力尤も強く、從て善となく、惡となく、耳目にふるゝところはかたくおぼえて、身を終るまで忘るゝことなし、されば其智をひらき、行を修むるは、此時を以てよろしとす。かゝれば人の智愚におひたてるも、決して其子の性とのみゆるすべからざるなり。

抑おのが愛子をして、十分すこやかに、且萬事不足なくおひたてんとならば、前にも述べし如く、其母の姙身中より心掛けざるべからず。先づ毎日ほどよき食事と運動とをなし、氣分をおだやかにもちて、みだりに心を激せず、又ねむりもほどよくせざるべからず。もし之れに背かば、生るゝ子の害となること古今にてらして明なり。されば姙身中は右の注意を怠らぬやう心掛け、尚あしき事はなるべく見きかず、常に善人君子の事をおもひて、其行をしたふときは、おのづから胎内の子に感じて、たゞすこやかに生長するのみならず、心までも、善人君子の氣象をうけて、世にもめでたき人となり、父母まで幸福安樂のよろこびをうるに至ること必定なり。昔周の文王は、其母の姙身中の心掛よかりしより、さまでめでたき聖人とはなれりといひ傳ふるは、全く然かあるべきことなり、西洋にも此注意によりて善人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

君子を得たる例一々かぞへあぐるにいとまあらず。實に注意すべきことにころ。

二、幼稚園保育の主義

幼稚園は其始め獨逸のフレデリック　フレベルといふ人の建てられしものにして、いまにては歐米各國至るところとして此設あらざるはなく、我日本にも追々設けらるゝはよろこぶべきことなり。

抑、幼稚園と名づけしは、幼兒を保育するさま、さながら園中の草木を土かひ養ひつるか如くなればなり。かの園丁の草木を養ふを見るに、よく其性質を探り知りて、こをあやまらざるが如く勉め、以て美しき花實を結ばしむ、かくよき結果を見るまでには、其丹精いふばかりなく、朝な夕なの勉め怠りなく、せざるべからず。フレベル氏いへることあり『草木の如き情なきものすら結果のよろしからんを願はばかゝる丹精をこらさゝるべからずまして情ある人間をよきにしたてんには幼稚の折のをしへ忽にしてよからんやと』此言實によくいひ得たるものなり。

かくてフレベル氏は多年苦心して、幼兒の性質を究知することに心をとゞめ、遂に自ら幼稚園を設けて幼稚保育の方法をも研究せられたり。

幼稚園保育の主とするところは、小學校の必須課目の如く、きびしく課すべきものにあらず、遊戯、唱歌、細工、説話等をなす間に、幼兒の觀察を促し、注意をひき、心目を樂ましめ、手指の運動をなれしめ、且意匠を鋭敏ならしめ、以て心力を開發し、身躰を强健ならしむるにあるのみ。

幼兒漸く手をのべ、足を運ぶ時に至りて、始めて經驗の區域廣まり、目に見るものは之をつかまんとし、つかみたるものは之を伺はんとして、こをなげうち、其やぶるゝを見てよろこぶは、これ幼兒の好奇心のいたす所なり、されどよろしく此好奇心を利導して

用ゐざるべからず。もし境遇あしくして、かゝる悪戯をむりにれさへ、またしからずとも、これをくりかへさするときは、習ひ性となりて、容易にとりかへすこと能はざるべし。されど適當なる玩弄物を與へて、其欲を滿足せしむるをよろしとす。これぞフレーベル氏の適當なる玩具を與へて此好奇心を他に開誘利導せんとする所以なり。

また幼兒が自發の活力によりて、活潑なる遊戯をよろこぶは天性なり、此天性を開誘利導して、正しき秩序と、美妙とを養はんとするは、幼稚園の主とする所なり。こを云ひかふれど、幼稚園は規則正しき秩序ある一の遊戯場なりとのことなり。此遊戯場はいかに幼兒に快樂を與ふるか、またいかに心力を開發するかは倘研究すべきことなり。今幼稚園の始祖フレーベル氏はじめいかなる方針によりて此事業を企てられしかは、男爵夫人が同人にあひし物語によりて知らるれど、左に其大略を記すべし。

西暦千八百四十九年五月の末つがたバロネス夫人は湯治せんとイベスタインに旅の日數をかさねたり。つれづれなるあまり、何かなぐさむこともやと、一夕宿の主婦に何ぞ珍しきもののなきかと尋ねたり。答らく珍らしと申さむ申すべきことあり。いづ地より來りし人にや、此近きほとりに數週間前にうつりきてすまへる人あり。此人すこし許りの地をかりて、ひねもす村の子供等をよびつどへて遊び戯れ、をどりくるへるさま、たゞ人ともおもはれず、されど皆其名をしらで、天然の痴漢とのみ呼べりと。其後バロネス夫人近傍をそゞろに散歩せんとていでゆきしに、丈高く瘠せたる人の、長き灰白色の髪の被りたるが、三才より六才位までとおぼしき子供等の一隊を導けるにあひたり。子供をば二行となし、二人つゝ手に手をとらせ、小丘を昇りつゝ歌うたはせ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

みづからも歌ひて遊戯をなせるさま、いたく夫人の耳目をうばひ、知らず〳〵其身を群中に入らしめぬ。婦人は此時いまだかれの名を知らざりしかど、子供の一人ッレベル先生と呼べるをきゝ、初めて遊戯によりて幼兒を教導せんと企て居る人の名なりしことをおもひいで、これより互に厚き交りを結びしとなん。

三、幼稚園教育と家庭教育との別

世の人或はいふ、家庭の教育だによきにかなはゞ、敢て幼稚園に出す必要なしと、こは大なるおもひたがへなり。幼稚園の教育もとより家庭教育のたらざるところをおぎなふにはあれども、家庭にしてをしへたればとて、それにてはかなはぬことあり、そは何ぞや、幼兒發育上いと〳〵かなめなるかの交際と云ふことのかなはぬことぞかし。そも〳〵人は交際によりて經驗をひろめ、智力をみがき、徳性をやしなひ、身體をすこやかになすものなるを、家庭にのみありて、父母兄弟姉妹の外、交はらざれば、いかならむ、受感の區域せまく、從てそを發表することの葉の練習も又尠かるべし。加之知らず〳〵の内に我まゝの心生じ、人をあはれむ情にとぼしきやうになりゆかん。またおのづから快活の運動もかき、身躰の發達をさまたぐること、これみなしろしめすことなりかし。

從來とめる家に生れたる子にして、すこやかにかしこきは稀なり、これ他なし、大切なる幼きほどを、無教育なる子守乳母の手にて多くあつかはれ、いたづらにこびへつらひに其機嫌をそこなはざらんことを願ふが故に、心おのづからおごり、且身躰の運動も多くはおさへらるゝがために、たゞ〳〵虚弱にのみながれ、甚しきは男子も女子の如くなるためしなきにしもあらず、また父母たる人みづから手を下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して教育する中にも、熱心のあまり幼兒の體力をもはからず、おもはず其度をすごして世話をやき、苦を與へ、窮屈にかゝりおひたゝせて、發育をさまたぐるためしまた少しとせず。されどよの父母たる人望むらくは、幼稚園に入れて保育をうけしめよ。

フレベル氏いへることあり。『眞正に其子の利害得失を協議すべき母親は幼兒の三才となるを待ちて幼稚園の保姆に委托すべしと』其迄にいへり。兒童に稟賦の性を啓發せん機會を與るには、群集中におくをよろしとす。かゝれどおのづから珍聞奇事にいであひて、情思、感動、艱苦、快樂、願望、等各々十分に發達すべき生涯の萌芽となり、ますゝゝ其區域をひろめなど、智力従て増加し、身躰も亦一層活潑を加へ、健康をたもつべし。されど幼稚なるものゝ發達を全うせんとするには、相互に教育をせしめんため、群集中におくをよしとす。従て母たる人も其事に通ぜる熟練せるものゝ手に委任すべし。

四、幼稚園に幼兒を出さるゝ父母の心得

一、幼稚園はもとより幼兒を教ふる所なれども、小學校とは其歸するところおなじからざれど、教育の仕方もいたくちがひ、今日まなべることを、明日あらはさんとするもかなはず。されどみだりに幼稚園に於てまなびたる結果を試みんとするは、大なるひがごとなり。たゞ幼稚園は後來教をうくる土臺となるのみにて、いまだ柱を建てつるにあらざること、心にとむべきことにころ。おもはずして、いたづらに文字のよみかき、はた數をかぞふるわざなど責めなんにはいかならん。かのおのれが子は、もはや入園して半年にもなりぬるに、いまだいろはだにかきねられぬなどいへる苦情は、おのれが耳に痛苦をおぼえしむること大なり。これ所謂實に幼稚園の主義方法等をも辨

へずして、徒らに破らんとする鐵槌ならんか。

二、さて賞罰については、幼稚園と家庭といちじるきけぢめなからんこと肝要なり。幼稚園に於ては、すべて從順なる習慣をやしなはんことをつとめ、從て人を愛し、人をあはれみ、我儘の心をおさへ、萬事自然的に取扱ひて、事每にむねと誠の心よりいてしめんとねがふが故に賞罰ともに自然の道理にもとづきて導きをしふれど、家庭に於ても其心にて、或はきびしきにすぎ、甚しきは体罰など加へざらんことぞのぞましきや。

思ふに父母が其子をおしふるにつき、まづ必要なるは深くして且正しき愛情なり。此愛情ありてよき模範をしめしよき事を敎へて、あしきくせのつかぬ樣に、心を用ふること肝要なり。かゝれど子供はおのづからよき性となるものぞ。强ちにいたくしかりこらし、又は責めたりとて何かあらん。却てねぢけたるものとなること多し。よく〳〵心つくべきことなりや。

三、次に幼兒を欺き、また欺かるゝことなきやうせざるべからず。世には子供の泣きいだす時、一時ろをすかさんとて、あるはおどし、あるは欺くためし少なからず。幼兒の食物をねだる時など、晩にかひてつかはすとか、明日求めてとらすからといひて、其まゝに打すぎ、心にもとめず、又明後日は上野、淺草へつれてゆかん、おとなしくせよといひて、更にけしきなく、或はよく留守居せど錦繪の土產とらせんなどいひて、僅かにせんべいの一ふくろにて其約をふまざるなど、これら皆父母のしらず〳〵の內に、みづから僞ををしふるなり。

又幼兒父母のいひつけをきかぬとき、是非をきかせんとて、あられぬことをいひておどし、何所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へあづけるとか、また飯を食はせぬとかいひ、又しきりに泣く時ろをとめんとして、巡査がくるとか、オバケが出るとかいふ、これらすべていとわるきことなり。以上の如くして養ひなば、成長の後偽をかたり、約束にたがひてはぢず、又懦弱にして勇氣なく、物の用にもたゝぬものとならんこと必定なり。されど父母は何事にも其身をつゝしみ、かりそめの話にも、まことなるを以てし、其約は必ずふみ、必ず守り、子供をして誠を貴び、心の勇氣を挫かぬやう、心を用ふべきことなり。彼幼兒の中には、幼稚園にいづるをいとひて、或は頭いたしとか、腹いたしとか、いひて親をあざむくものあり。これらよく〳〵心を用ゐて、幼きほどに改めざれば、他日成長の後いつはりをいひ、其意を貫かんとする基となりぬべし。おもはず愛情にひかされて、あざむかるゝは、いづこの親も一つならめど、心つくべきことにこそ。されどまことに氣分あしきか、又は他の希望に對し、不平の心などある折ならんには、そをよきに處分せざるべからず。ことどをかふれどよくもとのおこりをたづねてよろしきに處分せられよとの事なり。

四、さて次は缺席の幼兒に害ある一事なり。小學校の生徒の如くさまできびしく取扱ふはよろしからざれども、行くべき所には必ずゆき、なすべきことは必ずなすといふ習慣を、幼きほどよりやしなはざるべからず。かゝれば他日本分を全うする良民となるべし。ことに幼兒は幼稚園をいとふにあらず、たゞあたゝかきたらちねの母の懐を、はなれんことの心にすまで、何となく氣むつかしさをまなすは、幼兒の常なり、よきにはげまして、園課をかゝしめざるやうしむくるは、母たる人の勉

ならんか。

五、をり／＼當園をおとづれ、愛兒の保育上につき、親しくおはなしあらんこと望ましき限りなり。

五、幼稚園保育の結果

前項既に述べたる如く、すべての幸福のもとゐは幼稚保育にあるものなれども、其結果は幼兒が生長したる時ならでは知るべからず。又現に其成蹟をあらはさんとするは、幼稚園教育の主義にあらざるなり。たゞ小學校に入り來りし時、よく物事に注意して、其趣味を感受し、また身躰の發達も平均し取扱上他の生徒と異なる所あれば足れりといふべし。今現に我附屬なる幼稚園より小學校に入り來れる子の有樣を見るに、幼稚園より來りしものは比較上順從にしてよく物事をわきまへ特に教師を敬慕する心に富み、且友だちの間がらも尤も親密にして、喧嘩口論などすること甚だ少く其他教室にありてもよく規律を守りて教課をはげみ試驗の成績より推すも十中の七八分までは其功驗の著しきを認めぬ。

すぎし廿七年の十月に調べたる結果を見るに、幼稚園の保育をうけしものにて、本校に在學せるもの高等科に二十人尋常科に五十五人あり。其中各自其級の中等以上に位せるもの、高等科に十五人尋常科に三十七人、合せて五十二人に至るを見る、こゝに至れば、予がふたゝびいふをまたざるべし。

附、學齡未滿の幼兒を學校へ入學せしむべからざる事

親の心として、我子ははやく物まなばせんとするは、なべてのならひなれども、未だ學齡未滿の幼兒を、無理に小學校に入れしめんとするはよろしからず。これ幼兒のために大害あるものなり。已に前にものべたる如く、幼稚園と小學校とは、其歸するところおなじからざれば、從て方法を異にし、課程も

いたくちがへれど、いまだ身躰の發育も及ばざる幼兒に、急に小學校の課業をふませ、急にきびしく取あつかはすれど、たゞむづかしき課業に腦をいたむるのみならず、はては衰弱をきたし、知らず〳〵のうちに、取かへしならぬ大患を引おこすことなどもありぬべし。

すべて幼兒は、他人に打かたんといふ心つよく、常に上へ上へとはせをるものなれど、少なき仲間の幼稚園にをらんよりは、大なる仲間の小學校生徒の列に加はらんとねがふは、當然にして、兩親も亦子の出精をねがふあまり、おもはず小學校に入れんと企つるは至當の事なれども、教育の事業は他の事業と異なれば、いそぎたりとて、よき終をむすぶべきものにあらず、時期の至るをまちて、しづかに度に叶ひたる教育を施さん方、却て大効を見ること多し。すべて教育は、人間の心と躰との發達、ならびに強健をたすくるものなれば、心と躰との發達の順序に伴ひて、其方法を施さゞるべからず、此順序をふまず、一足とびに上へ進まんとは、幼時いかに鋭敏にして、よく物をおぼゆるとも、次第〳〵に其力を減ずべし。彼神童も十五歳にして愚鈍となるといへるも、偶然の事にあらざるべし。されどにや、文部省もこゝに心を用ゐられ、度々これが爲めに訓令を發して戒めらるゝは、皆しろしめすことならん。（完）



奈良義成の妹

壚井ふく子

玉顔蛾眉の人、世に少きにはあらねど、大方は繡物の表ばかり美しうして、裏のきたなきが多く、心までう

らなき錦なる女子は、古來幾人かある。奈良義成の妹女こそは、姿も心もともに美はしき花の少女なりけれ。其名は何と云ひしか、今知るに由なけれど、おのづからそなはりたる天性の美質、しらま弓はりたる眉の匂ひめでたく、はちすの眸あきらかに、年はやよひの春の花のさかり、十六夜の月の光りのかゞやきたるばかりなるに、よく書を讀み、和歌を好み、月に詠じ、花にうたひなどして、姿よりこゝろまで、一すぢに靑柳の糸のやさしけれど、起居もしとやかに、母に、兄に、その色香に劣らず、心の誠を以てつかへたり。併るに佳人多く薄命と云ひけん、此妹女も、天性の美質が、反りて身の仇となりたるこそ是非なけれ。

永祿年中、義成伏見に寓し、西岡の人、貞光久左衛門といふ人に就きて、笛ふくわざを學び居りしが、久左衛門、ある時、此妹女を見けるに、殊の外の美色なりしかど、大に愛慕して、淺間しくも、兼ねて娶りたる妻を離別なし、妹女を妻となさんことを義成に請ひけるに、前妻を追ひ出して、我妹を配するは、人倫の道にあらずとて、かたくいなみてうけひかざるほどに、久左衛門は愛慕の心ます〱切にて、それよりはしげ〱來りて親しみを深くなし、ひそかに、いつかは望みをはたさむとせしに、義成は、ます〱師弟の禮を嚴にしぬ。久左衛門また云ひ出でん便りもなく、さりとて戀々の情はいや止みがたけれど、自ら玉章をものして、妹女がり送りなどすれど、窈窕たる淑女、いかで親同胞のゆるさぬ人に靡くべき。封だに開かず、うち捨てけり。されど、久左衛門はなほあかず、千度八千度誠をあらはさど、切なるこゝろの奥をもあはれと思ひ汲む事もやと、なほ、さま〲とはかなき事を云ひよせ、夏草のいやしげく日毎に經めぐりて通ひなどするに、奈良氏は困じ、母とはかりて、妹をば野村高勝といふ者にめあはせん事を約しぬ。久左衛門こ

の事を打ち開きて、大に望みを失ひて、いたく恨みねたみたりしころあさましけれ。

其後、永祿十二年の春、大將軍義昭、本國寺にあり、三好黨悉に起りて本國寺を襲ひたりし時、義成も三好氏に屬して之を攻めたりしに、軍敗れ、遂に東寺に走らんとす。久左衞門かねての恨みをはらすべき時は今ころとて、師弟のよしみをも省ず、義成を得て、腹いやさむものと欲し、追ひかけて義成を呼びしに、義成も馬をかへし、戰はんとせし折柄、敵十余騎ばかり追ひ來りて、久左衞門に力を合せ、義成をば射たりけるほどに、義成遂に矢にあたりて斃るゝを、久左衞門來りて首をかゝむとす、義成刀を揮て久左が左の膝を斫り、再び刀をあげんとする時、敵つゞきて來り、遂に義成を殺して、久左をば爪彈きして笑ひのゝしりたりしとぞ。

さて、久左衞門は、日來のうらみを報ひたることゝちして、大によろこびしが、なほも獸欲增長し、此機に乘じ妹女をも奪ひて、こゝろのまゝにせんものとおもひ、直ちに伏見に赴き、妹女を奪ひ、己が家に提げ來て、一室に入れて、固く閉せしに、妹女は消ゆる我身は惜しまねど、伏見にある母親が心を思ひ汲みて、悲しさやる方なく、心も心ならず、現心もなかりしが、叶はぬ處と思ひ返し、俄に容貌をつくろひ、みだれたる髮をもかきあげなどして、言葉靜かに久左衞門に向ひていふやう、妾はのかにきゝ侍るに、夫も、兄も、戰敗れて、果敢なくなりて、今ははや孤寡となりたる不幸の身の上、哀れとおぼしたまひてや。鄕里におはすなる母親の妾をおもひて、如何ばかり歎き悲しみ玉ふらんとおもへば、せめては、書よせて心をもなくさめん事を、叶へさせ玉へとて、色をさへ柔らげていひしに、久左衞門も悅び、然るべしとて心安くうけひきたり。妹女はありし事々を具に

認め、御養育の萬分の一をも報ひ奉らず、身の不徳より御心をのみ痛め奉る罪のふかさ。かくなり居り候間も、如何ばかりなる御心にやと、日來の御慈愛のほどより量り候も、誠に身もこゝろもあらぬ思ひ致し候。迚も此の世にてはつくしまつる道もなく、此の世にては、また身をも操をも全うする事のかなはず、不孝とは存じながら、死に勝る耻をむ見じとおもひ侍りて、後の世へと心ざし候。老少不定の世の中とおぼしあきらめ、不孝のこの二の事は忘れさせ玉ひて、世を安く過ごしめされんことをころ願ひ入り侍れ。おもふ事、拙き筆には盡されず、地下にて逢ひ奉らん折りに、萬は御詫申し侍らむとて、末に、

おもひがはふかき淵瀬ははやけれど
さろふ水には名をながさめや

といふ歌を添へ、髮毛を切りて封じ、さて久左衛門に託し、人をして伏見に送らしめたり。

さて、久左衛門は、妹女が心のうち解け、己に離かん様子の見ゑけるに、大に悅び、使者を出せし後、女の傍によりて戯れかゝりけるに、妹女俄に起ち上り、久左衛門が腰に佩きたる太刀を抽くより早く、久左が腹をしたゝかに貫きて、とゞめをさし、おのれもまた其まゝ腹を屠りて仆れ伏しぬ。げにゆく末の色も香も籠りたる、つぼみの花をあたら嵐に散らしたるは、をしむべき限りにして、又世にも勇ましき最期なりけり。

伏見なりける母親は、娘の奪はれしに、前後も知らず歎き沈し折りから、娘よりの便りと人の持ちこしに、急ぎ披き見しに、いと哀れなることの水ぐきのあと、涙ににじみてわかぬ處さへ多きに、悲しさいやまさりて、直ちに使者の面のあたりにて、自刄せしに、使者は驚きて歸りたりとぞ。かく、親子三人、無慘の最期を遂げたれど、天定りて人に勝つ、奈良氏の苦節、い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かでか湮滅に歸すべき。他日信長この事を聞きて、貞光の不義不仁なるを疾み、戒めざるべからずとて、その妻奴子等を捕へて磔殺なしたりとぞ。貞光一家の不幸は、身より出でたる銹びとやいはまし。なべて、世の人の、消ゆれど朝露の身、五十年の榮華も、薄命も、唯一場の夢と覺めて、世に殘るは善惡の名、嗚呼人たる者これをもて、かれに代へんや。

八重菊八重牡丹

住山幾子

源義平の飛驒にいたりて、士卒をあつめたりしことは、史に載せて傳ふれども世その詳なることを知れるもの少し。飛驒の碩儒赤田臥牛翁、之を考證して、碑を同國大野郡白川村傘松城の舊跡に建てたりき。いま其碑文中なる八重菊八重牡丹といへる二息女のことを言はんに、始め義平の飛驒に到るや、同國白川村なる一山を據として、一城を築かん準備の際、同村の豪族吉田某の與かりて之れに力を盡しもの〻如し。而して後義平遂に吉田の一女を妾として、一女子を擧げたり。名を八重菊となん名けたりけり。然るほどに、間もなく又懷姙して、いまだ分娩せざるに、京師の風のたよりに、義平の兄義朝ころされしときこえしかど、士卒悉く四散して、また一人なし。義平せんかたなくして、身をそひめ京師にいたりて、平家を狙んと決意し、出たゝんとして、その妾に言ていはく、もし男ならむかならず報せよと、いひのこして飛驒を出立してけり。然るに、その子うまれしに、女なりしかど、八重牡丹とぞつけたりける。

後に義平みうせにしかど二女は長じて、おもへるやういかで京師にいたりて父義平の菩提を弔はやとれもひたちて、うちつれて故郷を立出けるに、彼の白川と

いへる川にいたりて、激流の上にかけたる籠の渡といふものを渡らんとしけるに、八重菊の紅裾や見えたりけん。わたりのものども大に笑しかど、八重菊、籠の渡の綱をはづして、紅裾をればはんとせしに、如何なるはづみにかあやまちて激流にさかさまに落ち入りてけり。妹之れを見て、姉の八重菊死しては、世にいきて何の詮やあるとて、己れも身を投じて、死したりけり。時に姉は年十七、妹は十五なりき時人之れを悲しみて、俗謡にうたひていはく、

吉田八重ぎく八重ぼたん
名をぞとゞめた薄浪に

飛驒の國人今に五月の田植歌として、口碑に傳へて歌ふ。かくてその薄浪にの一句何の故たるを解せず。したゞわらは古老にとへども知れる人なし。飛驒の吉城郡船津町といふところにて人の語るを聞けば、うすなみとは白川といふ川の流れて、越中に到りなんとする處にうすなみの淵といふ處あり。八重菊八重牡丹の屍、是に至て岸に揚れり。時人之れあはれみて、こゝに葬れりしといふ。信なるが如し。

家政

たちぬひ

西山たい子

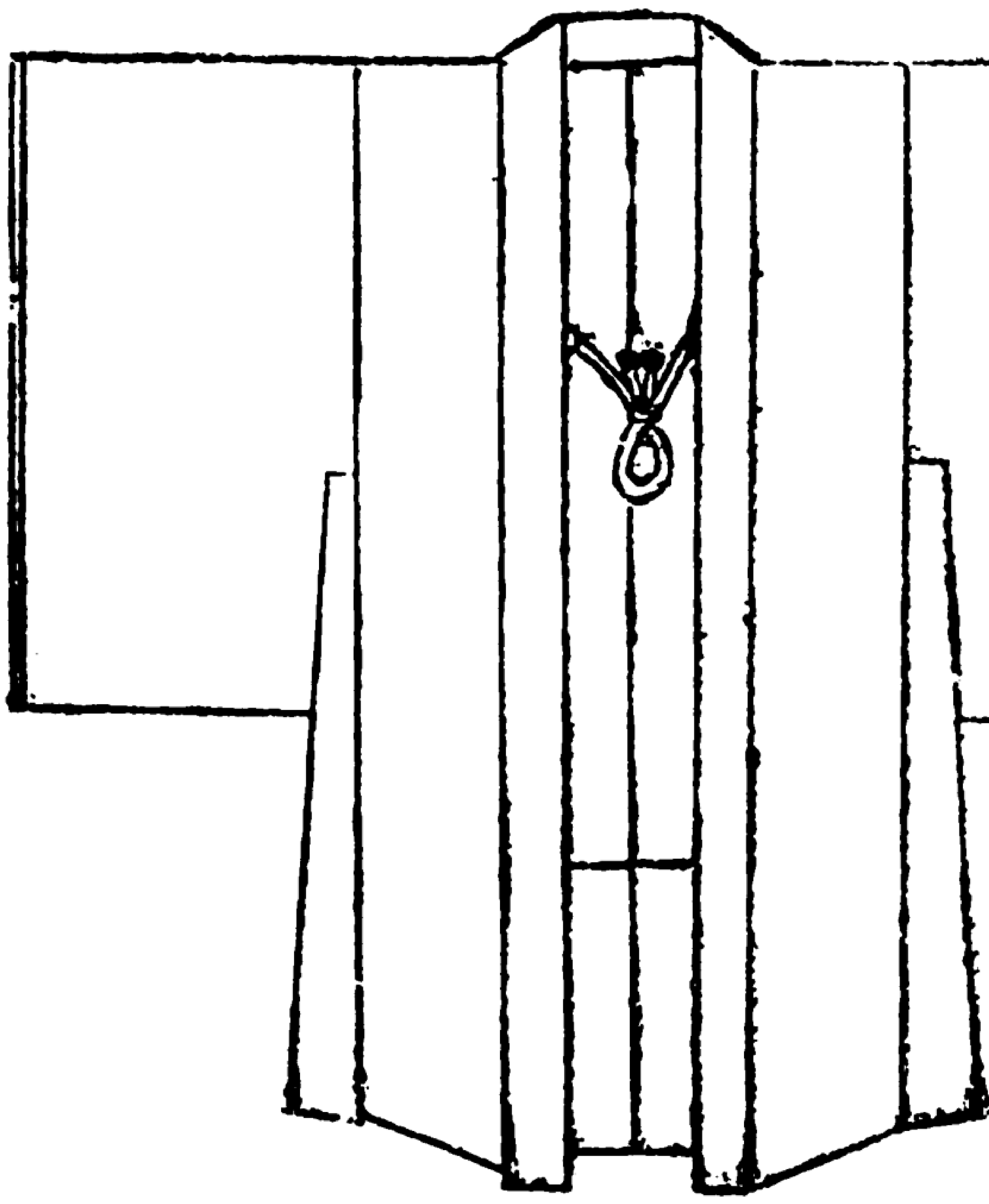
中裁羽織縫ひ方は、小裁もの、或は本裁ものと、寸尺の異なるのみなれば、略す。

(廿八)本裁羽織の裁ち方

まづ袖丈だけをとり、身衣の縫ひ上りの丈けをはかりて、それに、前下り、及びかたあげ、縫ひこみ等を加

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

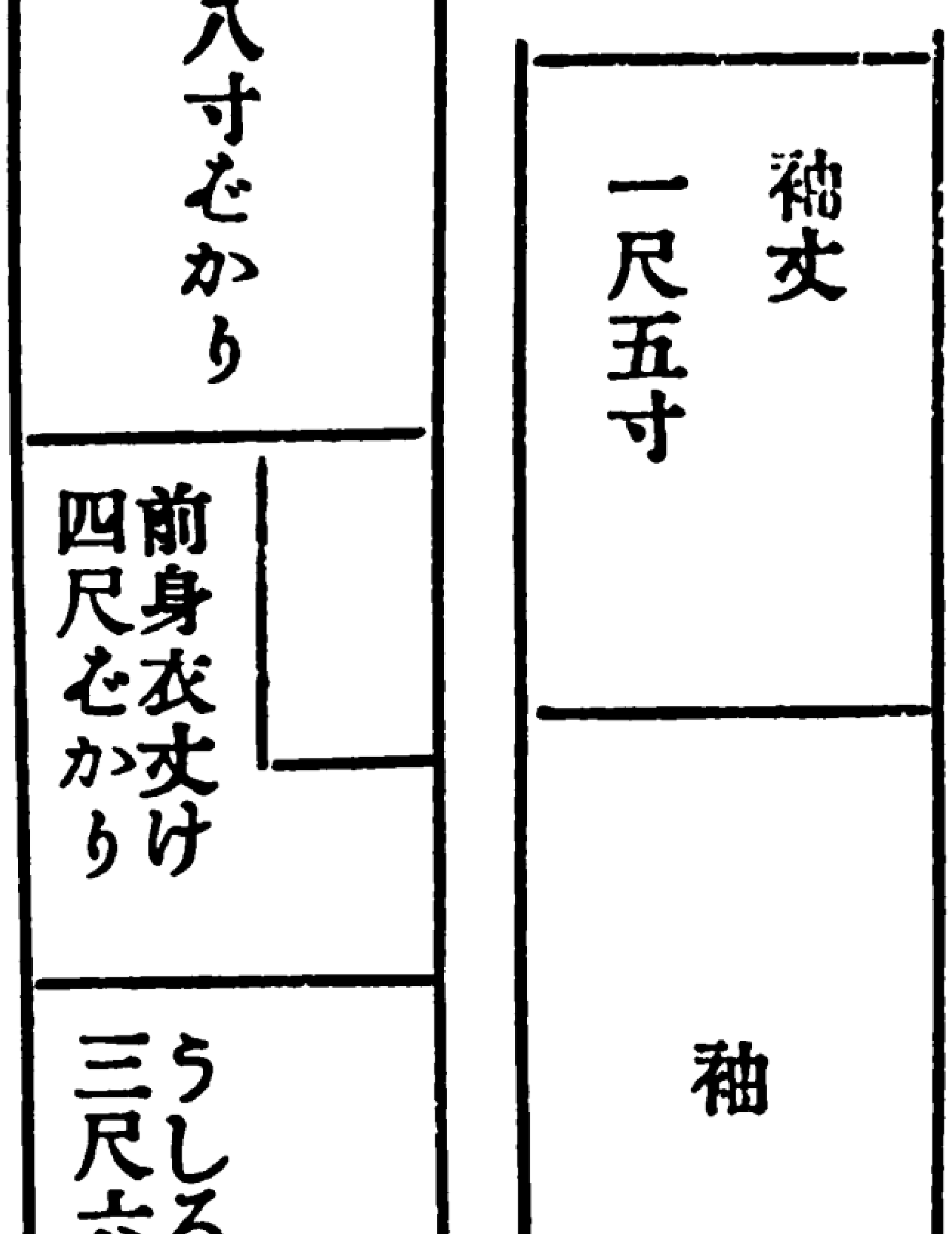
中裁羽織縫ひ上りの圖



前下り五分より袖巾七寸五分　後巾七寸　襠巾一寸二三分
丈け二尺二寸ばかり　袖丈一尺六寸　付け六寸　袖口五寸五分

へたるもの、二倍したるものを切り取りて、襟をなすべし。殘りを二つに折り、その折りたるものを、一方を前下りだけ長くして、また二つに折り、えりがたをあげ、そのきりたる處より、前の方即ち長くなしたる方を眞直にかきとりて襠と袖口とにすべし。えりかたの切り方は圖を見合すべし。

羽織本裁

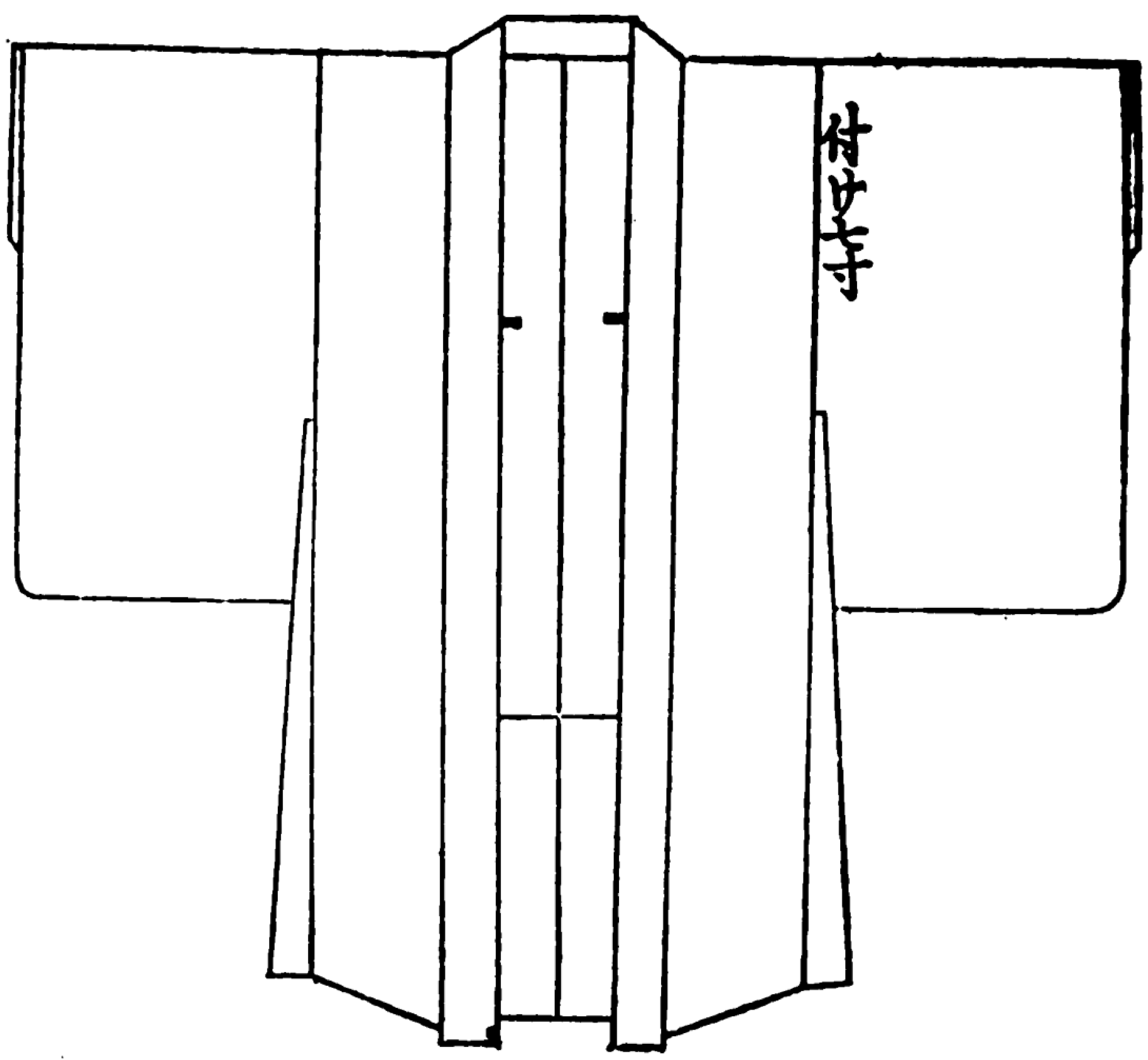


（廿九）本裁綿入羽織の縫ひ方

まづ例の如く四袖をぬひ置きて、次に背を表裏ともぬひ、丈を定めて、胴を合せ、前も、また、前下りを小裁ものに云ひてし如くになしてぬひ、前身をもよくそろへて合せ、後巾を定めて、襠をつけ、ひも付をつけて、さて襟をば巾を二つに折りて、前に云ひし如く裏身の方に縫ひつけ、例の如くにして綿を入れ、ひさかへしてくけるべし。

袷羽織は次にしるさん。

女羽織縫ひ上り圖



袂巾七寸五分より八寸　襠巾一寸六分　衿巾一寸八分
ひもつけ背縫ひより一寸五分より一寸丈け二尺四五寸

だいどころ

鯉こく

先づ鯉の膽をつぶさぬやうに筒切にし、扨て鰹節の煮汁にて味噌汁を薄く拵へ、之に味淋少量を加へ、其沸騰たるところに前の鯉を投じて、二三十分間程煮立て、味噌汁の味出たるを椀に盛りて用ふるなり。但し吸口は欵冬のトウ又は木の芽抔よろし。

鰔魚の吸もの

鰔魚を三枚におろし、皮を外にして結び、これをザツト湯で別に味噌汁をつくり、(れとし味噌を佳しとす。)其沸たちたるところに前の鰔魚を投じ、取合には蓴菜筆頭菜野蜀葵抔用ひ、吸口には木の芽を用ふべし。

売蛤蜊の吸もの

売蛤蜊は二三時間も水に浸て、砂を吐かせ、之をよく洗ひ置き、扨てれとし味噌にてつくりたる汁を沸たて之に蛤蜊を投じ、其貝ひらくを待ちて、椀に盛り用ふるなり。吸口は生姜の汁などよし。

牡蠣豆腐

鍋に湯をにたて置き偖て牡蠣の剝身を投じ、又た豆腐を金杓子にてろぎつゝすくひ入れ、之を山葵醤油にて用ふるなり。

又た清汁を製へ置き、其中に牡蠣の剝身と豆腐を好き程に入れ、吸ものとなして用ふるも宜し。

隠くし汁

葛粉を湯にてかたくねり、之を扁平く好き程に展し、赤味噌のこしたるものを之にて包み、饅頭の形に拵へ湯でゝ後、椀にもり煮立たる煮出を上より注き入て用ふべし。饅頭を破せば味噌汁となるゆゑに此名あるなり。但し味噌の中へ香味野菜など好みのものをいれて宜し。

泡雪吸物

何にても白き魚の皮と骨を去り、肉をたゝき、擂鉢にて擂り、これに雞卵の白身を多量に投じ、味醂の煮キりと食鹽少量を加へ、水にてよきほどにゆるめ、更らによく擂り交ぜて後、茶筌或は箸四五本にて攪きまはし泡のたちたるを見て、これを金杓子にて清汁の沸立たる中にすくひいれ、鍋の蓋をなし、汁の沸あがるを待ち、椀に盛るなり。取合は芽獨活、三ッ葉などをよろしとす。

蒲鉾松露汁

落し味噌の汁を作り、扨て蒲鉾を短冊に切り、松露を目笊に入れ、手にてころがし、能く洗ひザット湯で、味噌汁の沸立たるところに投じ直ちに椀に盛りて用ふるなり。

このごろ

鋤柄義子

れんこんはこのごろ植ゑかふべし。

めうがの根わけもすべし、これは鍬にてほるをいむべし、なほ根わけすべきものゝあらましは。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なでしこのたぐひ。きく。などすべて草花はこのごろなり。

うゑかふべきもの。

鉢のうめ。さくらなど。花はすの土とりかふ。しゆをん。ふよう。さはきく。さゝりんどう。もじずり。わさび。つくいも。なかいも。くわい。

冬木のるゐは六月末ころまでうゑかへてよろし。

種をまくべきもの

たちばな。まんりやう。ぼたん。しやくやく。おしろひぐさ。千日草。けいとう。あさがほ。ひあふぎ。しやが。をだまき。とらのを。きゝやう。月みぐさ。苧。まくわうり。西瓜。いんげん。さゝげ。ふだんさう。ちさ。落花生。とろゝ。たうきび。つるな。たうごま。

つるものは二葉のうちに根をすこし指にてうごかすべし。さすれど小根生じて、うゑかへのをり苗いたまさるべし。

さつまいもは種をとこに伏すべし。

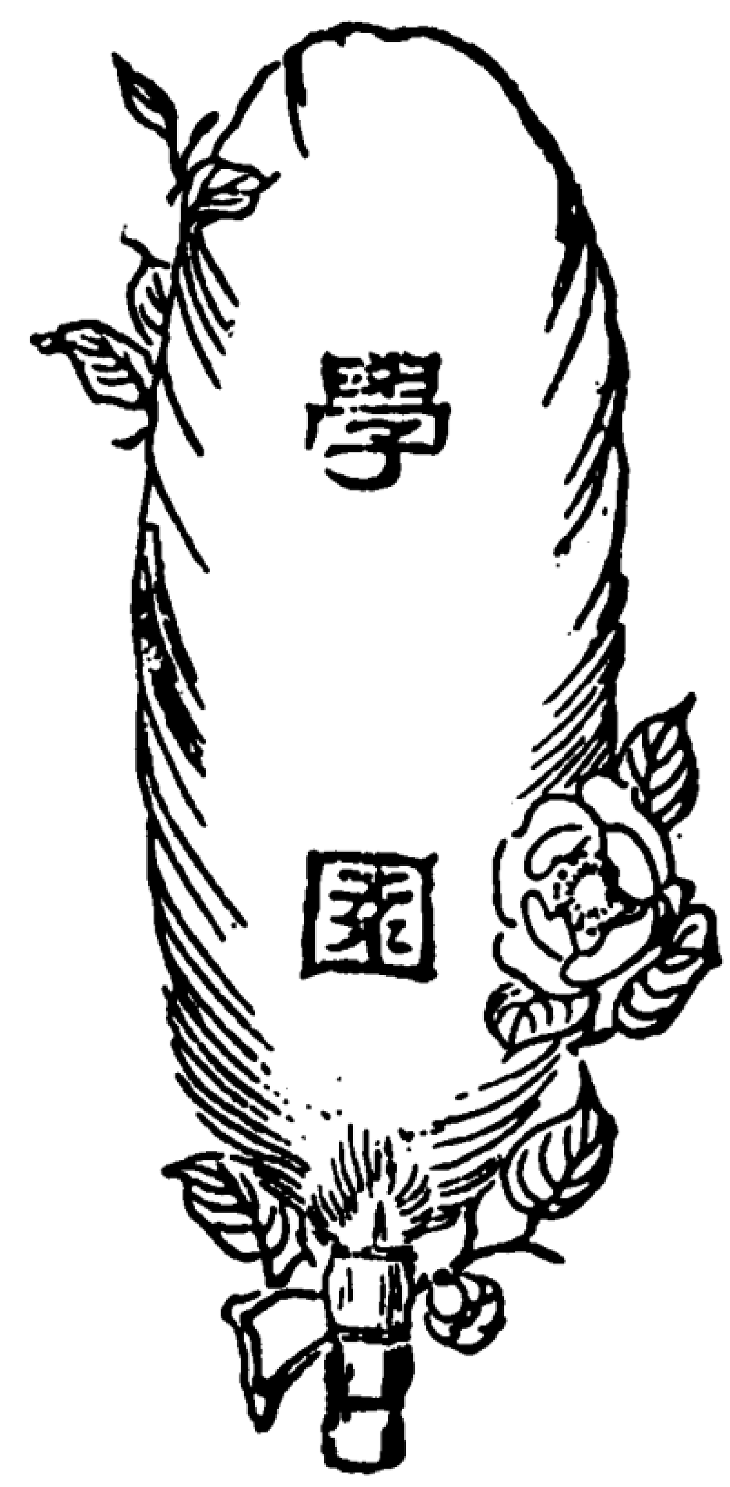
くはのゆひたてをときて、こやしをほどこすべし。

桐の木をもとよりきりて芽をふかすべし。まだ小さきほど毎年きる度ごとに芽ふとくなるなり。種をまくにはあくたの中にまくべし、土をおほふことなかれ。

四月三日は　神武天皇祭なり。　天皇大御みづから御祭あらせたまふ。皇居の方と京都の方にむかひて遙拜したまふべし。

おひ〳〵よき節となりぬれど人の心もおのづから春めくなるべし、柳は青み櫻は色めきて、げにうれしきころなりかし。





日本文典（七）

壚井正男

代名詞（かへことば）には、自ら四種の別ありて、細にいはゞ、また、そが中に、それ〴〵細かなる區別もあるなり。

第一　人の名に代ふる詞

これは、世の文法書には、人稱代名詞と稱するものにて、例へば、われ、汝、かれなどいふ詞にて、人の名の代りに用ふる詞をいふ。この中には、細にいはゞ、われの如く、自らの名の代りに用ふる詞と、また、なんぢの如く自らと相對して語る人の名の代りに用ふる詞と、また、かれの如く、對話の中にあらはるゝ他人の名の代りに用ふるものとの三種あり。

（一）自らの名の代りに用ふる詞は、文法書には、自稱或は一人稱の代名詞と稱す。此の類の代名詞は古と今、雅なると俗なると、尊きと卑きとなどのけぢめによりて、いろ〳〵なるあれど、まづ、世のつねに見も聞きもするは、

あ、　あめつちのそこひの浦に、あ（吾）が如く
　　君に戀ふらむ人は、さねあらじ。

わ、　何にせんに、わ（吾）をめすらめや。明らけく、
　　わが知る事を、歌人と、わ（吾）をめすらめや。

あれ、かうまでゑなさせたまひにしかど、あれにもあらで、ありき侍りしなり。

われ、わすらんと、野ゆき山ゆき、われくれど、
　　わが父母は、わすれせぬかも。

おのれ、風をいたみ、岩うつ波の、おのれのみ、

くだけて、ものを思ふころかな。

まろ、　たび人のかやかりねはひ作るてふ
　まろやは、人を思ひわするゝ。

わらは、　二親の、いざとくと、こゝへ來つるを咎め給はゞ、わらはも申す事侍り。只もろともにと宜はするおん身の應答を聞き侍らでは、生きて閾の外に出でじ。

み、　人にも語りつがせ、みをはめられんと思ふ人のしわざにや。

それがし、　それがし、かくて候ふらへは、御宿直仕り候ふべし。

やつがれ、　やつがれこそ、其の御父なりける人の御許へ、年頃まゐりなれて、よく／＼知り侍れ。

みづから、　みづからが申すこと、ことながくとも、ききたまへ。

其の他には、わなみ、ぼく、みどもなど、なほさま／″＼と多し、書簡の文章或は小說淨瑠璃などには、なほいろ／＼あり。

（二）　自らと對して語れる人の名の代りに用ふる詞は、文法書には、對稱或は二人稱の代名詞といふ。これ、もやはり。古今、雅俗、尊卑などの別によりて、いろ／＼なるあり。一つ二つあぐれど、（例はくだ／＼しければ略く）

な（汝）、　なれ（汝）、　なんぢ、
きみ、　いまし、　みまし、
わぬし、　おんみ、　そこ、
そこもと、　おまへ、　てまへ、
おのれ、　われ、　ごへん、
わどの、　きさま、　うぬ、

なほ其の他にもいと多かり。

（三）　相對して語る人以外の人の名に用ふる代名詞に

て、即ち、相對話せる人以外の人の名の代りに用ふるにて、この時は必ず第三の人なり。故に、文法書には、これを他稱或は三人稱の代名詞といふ。此の類も、また古今、雅俗、尊卑、敬ひ、いやしむ、などによりて、さま〴〵なるあり。

か(彼)、　かれ、　あれ、
彼のもの、　あのもの、　そやつ、
かやつ、　あやつ、　きやつ、
やつ、

其の他にも、いと多かれど、さまでは用なしとていはず。

すべて、人の名の代りに用ふる代名詞は、上に述べたるごとき區別あれど、とにかくに人の名の代りに用ふる詞の類をいふなり。人には限らず、他の下動等物をも、人の如くいふ時には、人と變らず、この代名詞を用ふるなり。犬猫の名をよぶ代りに、よくおまへなどいふことにて知るべし。

第二、　事物、場所、方角などの代りに用ふる代名詞、

これは、世の文法書には、普通代名詞といふ。例へばこれ、こゝ、こなた、あれ、あなた、などいふ如き詞なり。これにも、極めて近きに用ふると、やゝ離れたるに用ふると、遠く離れたるに用ふるとの三種あり。

(一)　こ、これ、などいふ詞は、宇治拾遺物語に「此の鬼どもをどりあがりて、こはなにぞと騒ぎあへり」。といふ如く、また「これ、人して、取りに奉らむをりにおゝせたまへ」などいふ如く。最近き事物の代りに用ふるが普通なり。

こゝといふ詞は「こゝに召すぞ」などいひて、最近き場所に用ひ、

こち、こなたなどいふ詞は、「鶯の聲に呼ばれて、こちくれど、ものいはぬ花も、人まねきけ

り」。などいひ、或は「紀の守の妹も、此方にあなり。われにかいまみせさせよ」などいふ如く、最ちかき方角に用ひたり。

斯く最近きに用ふるにも、事物、場所、方角などによりて、それ〴〵詞に區別あるやうなれど、其の區別は、さまで判然したるものならず、たゞ大概の區別なり。これらを、すべて文法書には、近稱普通代名詞といふ。

(二)　そ、それ、などは、やゝはなれたる事物の名の代りに用ひ、

そこは、やゝはなれたる場所に用ひ、

そち、そなたは、やゝ離れたる方角の名の代りに用ふる如し。これ等を、すべて文法書には、中稱とよぶ。

(三)　あ、か、あれ、かれなどは、遠く離れたる事物の代りによび、

かしこ、あそこ、あしこなどは、遠く離れたる場所の代りによび、

あち、あなた、かなたの如きは、遠く離れたる方角をよぶ代りに用ふる如し。これらを、すべて遠稱普通代名詞といふ。

普通代名詞の中には、細に分たゞ、斯く大やう近き遠きに用ふるものゝ區別ある如くなれど、その區別は、唯れはよろのことにて、つねのものいひ物語りなどには、其の區別は、ほと〳〵明には區別せられぬなり。近き物をさしてそれといふこともある如し。

磐といふ字につきて（承前）

永石徳文

湯津盤村萬葉集一卷十四　盤爾蘿生同六卷廿二　淄門乃盤母同六卷廿二　常盤爾座同六卷廿八　常盤奈須同十八卷廿八

舊說にこれらの盤を磐の字の誤りなりとあれど、かく五所までも誤るべきよしなし。故字書を考るに盤

磐は音義ともに通用へる字にて、續字彙補に盤は與磐同と注り。史記漢文帝紀に盤石之宗荀子に國安于盤石さあり盤を常には盤に作るなどもおもふべし盤は蒲管切、音畔桓韻鏡第二十四、轉唇音一等濁一位磐は蒲管切音盤桓韻並母韻鏡第二十四轉唇音一等濁一位と見ゆ。盤の音注磐とあるにても、盤は磐音義通ふ字なることを知るべし。凡て字書の音注に用ふる字は同句なることは云ふも更なる事にて、義も亦通ふ字なりかし。

漫録

なみだぐさ（承前）

堀田璋左右寄贈

京極忠高女作

この君の御事は卯月廿一日よき日なりと暦の博士考へ申けれど、やがて其程に入れ奉るべきことゝ玉へど、なにくれと急ぎたちて、其日に成ぬれど、この君を心ことに美しくつくろひたてゝ、身づからぐして入れ奉る。御あるじかたにも刑部の君の御母上、こゝにも姫君れはしけれど、あるべきかぎりきようをつくし、さほうよにめづらしきまでもてはやさせ給ふ。いづかたもく〱はじめてたいめんしたてまつれど、かたみにはぢらひながら、あるべかしき御物語すこしきこえて、あるじの御まうけいかめしう様々御心を盡して、もてかしづき給ふ。御かはらけ數多たびめぐりて、夜に入けれど、御さかもりになりて賑はしく歌ひ舞ひて、上下ゆすりて目出たく悦たてまつる。夜ふけて御暇申まかでぬるにれくり物ども玄なく〱ろくどもあまたゝび玉ふ。かくて後は心安く、晝の内はあなたに參り玉ひて、暮るれどまかで給ふ。遊びわざにかこつけて里がちにのみればすれど、かはるけぢめもなく心れちゐて

うれしくなん有ける。江戸へは年明春の比、御父君のぐして下り給ふべしと定まりけれど、心をのべて嬉しきものから、日の暮れ夜の明るもまづ心なく、過る月日もいつしか長かれとのみ思ふも我ながらはかなくなん。光陰は惜めども止まらぬ物なりけれど、夏過ぎ秋たけて、冬の初になりぬ。江戸には北の御方の御うどぎみ松壽院と申奉る日頃なやみ給ふて、秋の頃かくれさせ給ふ。御愁歎の御涙未だ乾かせ給はぬに、打つゞき御くま御前と申奉る姫君三つにていとはかなくうせさせ給へど、いとゞ御悲のひるよなくさう〳〵しき事にればしめして、御涙がちに暮させ給ふ。かゝる事どもをしゆりんの君きかせ給ひて、いと心苦しき御事にもあるかな、さう〳〵しくればさぞかのやうし若君を近き内に迎へ給ひて御らんせよ。さもあらむ自づから御心も慰み給ひなん。ときこえかたらひ給ふて、急ぎ御消息上せ給ふ。此御使神無月初頃になん來つきける。刑部の君の御方へも九郎兵衛のせうへも、かゝる御事くはしうきこえ給ひて、急ぎ若君を下し給ふべく懇にの給ふ。こなたには誰も〳〵しぶ〳〵ればして、いかでかく寒空に幼き人を遙々と下し奉るべきなど思ひ煩ひ給へども、江戸より重ね〴〵せうそこ上せ給ひて、まめやかにせめ渡り給へど、いなみ難くて下り給ふべきに定りぬ。かくいふは十月廿日頃になん有ける。うちきく心悲しなどもいふぞかりなし。つひぞかゝるべしとは兼てより思ひまうけ新事なれども、さすがに昨日今日とは思はず。さしあたりてはいかにせんと思ふ。誰も〳〵涙にくれまどひてかつはいま〳〵しきやうなり。さのみ心弱くてもあるべき事ならねは思ひしづめてよろづをれきていとなみ、下り給ふべきほどの御用意はゐるべき調度何くれと、上〳〵もの事までも刑部の君よりれきてさせ玉へど、只こなたには御ろとも縫ひ、うち〳〵の細かなる事までをぞ扱ひけ

る。佐々九郎兵衛のせうもとより心ひろう有難きまで情深き人にて、何事の折ふしにもまめやかに心よせ玉へぞ、まして此度は取譯嬉しき事に思ひ玉ひて、この君の御爲思ひいたらぬくまなく取もち玉ふ思ひやり、何かく物なれたる人にて、内々の細かなる事までも、心に入れて扱ひ玉ふを見るぞ哀れに賴もしき人の心にも有かな。れやなどさへもとよりおろかなるはかくまでおらぬわざぞかし。と身の濕みて娯しきにも、この人の心ぞせよ、人にはすぐれぬるゆゑにころ忠高の君はやうより人にまさりておはれなる物にれはしめして、また比ひなく使ひならし給ひける。ろの御なさけを深う思ひしりて身を捨て丶此刑部の君につき奉り、今の代までも御主の御爲ほうこうのちうを盡し、朋輩の爲に愛憐深くてよろづの道を正しくつかふまつり給ふゆゑに、ろの名四方にかくれなくて、天たうの御惠にも叶ひ給ふぞかし。忠高の君敵なく夢のやうにてかくれ給ひし事の胸に充ちて、御なさけの忘れ難き餘りに、この君の老さきまで心苦しく覺束なき物に思ひ給ふて、我命の内にとてもかくても行末たのもしく、ねさらぬすぢになしれき奉りて、心安く見置かんとて、この事をもおながちに思ひたちて、こ丶かしこさりぬべき人々にもことわり賴み給ひて、かたつかたの人のうらみもしらず顔に急ぎてかく物し給へぞ、さるべき事とは言ながら單へにこの人のれんにかしと思ひ知るにもいと丶感涙おさへ難くなん。此君はいかにればしまる事にか、些か別を悲しとも思ひ給はず、ひたすらくだり給はん事をうれしき事に思ひ、急ぎ給ふてはかなきもて遊び物を人の奉るをも、これは江戸の御母上のさ丶げ物にころせめ、と玄た丶めれき給ひつ丶、我も江戸の用意に暇なしやとの給ひて、走りありき給へぞいとをかし。よのつねの子供のやうに親のあたり離れがたく慕ひ悲み給はゞ、今ひとへ思もまさりて悲し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からましを、中々心安き物からさすがにから何心なくいわけなきありさまに、引分れ奉らん悲しさはやるかたなくに、ありける江戸の北の御方の御心ばせ比なく、女の御身にはめづらかなるまでおはしますと誰も〳〵はめかんじ奉るを、日比聞き及にし御事なれば、さりともかゝるらうたきありさまをおろかにはよもおぼしめさじ、とたのみながら、むげにちごならぬよはひにてまたはか〴〵しく人のおもむけをもみしり給はず、なかぞらなるほどにて、數多の人の中に立ちまじり給はん事は、猶覺束なく後ろめたく思ひやらるゝ、よろづ心のひるよなくかきあつめておもふにも、胸あくべくもあらずねをのみなきて日をおくりける。斯くて霜月十日あまりにも成ぬ。下り給ふべき吉日などさるべき方にて、時とらせけるに、十九日吉日なりけり。巳の時に立給ひて宜しかるべしと申ければ、さらば今いくかにこそありけれ、と日を數へつゝ泣より外の事なし。十六日には父の御墓所へ詣でさせ奉る。華やかに装束きせ奉りて、なでつくろひて出し奉り、名殘もいとゞながめられて、あはれ父のながらへまします世なりせば、此御事をも萬かひある樣にもてなし給ひて、めやすきうしろみならまし、この度の道をも具してこそ下り給ふべき。うらめしき世のならひかな、誰ものがれぬ事ながらおくれさきだつほどは、猶いふがひなかりけり。草の陰にてもいかばかり悲しと見給ふらん、と過にし方の悲しさも今さらのやうに思ひ出て、涙も止め難くなん。

わかれ行く涙のかゝる衣でを
　こけの下にもいかにみるらん

もろともに行べき身にもならなくに
　なみだばかりやさきにたつらん

いかにせんおろふる袖の涙さへ
　とゞめかねぬる人のわかれを　（未完）

あさせのしるべ（承前）

故人　藤井高尚

わき目八もく

こは碁うつにかたはらにて見る人はわが身のうへならぬからに、心まどひのなくて、うつ人よりはよきあしさのよく見ゆるをいふことなり。げに世の中のことすべてさやうにぞありける。こゝろまどひのなき人はふとおもひよることも正しくて、こよなききよきおもひはかりあるものなれど、なにごとも人にかたらひあはせてなすべし。人のいさめをきかであやまれるためしは、いにしへより世におほきぞかし。

柳の枝に雪おれはなし

人は大かたのこゝろばへをゝしく、大づかにたてたるおもむきありて、なにごともけやけくおもてにはあらはさずして、よろづなだらかに、とき世のありさまにしたがひて、つゆばかりも人とあらそひいさかはぬこそよけれ。さる人はこゝろのおくおはかりげなれど、たけくいかめしきよりは、なかなかに人のえあなづらぬものぞかし。

わが身つめりて人のいたきをしれ

とざまかうざまにつけて、人のためあしからんことはおしはかりおもふこそよきひとなりけれ。されどいかにおもひやりふかきもかぎりありて、人のうへは我身のことのやうにはえおもはぬものなれど、げにわが身をつみて人のいたいたきをおもひやるべきことなり。大かすれどうらみあふことも、うらむるふしもじねんにすくなかるべし。たとへば人にかうかうのこととしてとかたらふに、いなといひたらんには、わがおもふやうにならねど、はらだゝしくて、かばかりのことうけひかぬやうやはある、つれなしとおもひもしひとにいひもすれど、かなたにもきゝつけてこゝろえぬことといふゝもをひきよせて、こゝろとわがひがことをたすけゆ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さきの人の身をわが身になしてこの事を人のかたらはんにはいかにとれもひめぐらすべし。人のいなといふぞかりのことは、われに人のかたらはんにも大かたはうけひきがたきことにぞあるべき。されもひとけむ人をもうらみず、人にろしらるゝこともあらじ。すべてのことかうやうにれもひやりなんころわが身をつみてといふことぐさのこゝろなるべけれ。

杓子定規

もとより志かせんとおもひとれるにはあらで、なにとなきこゝろのすさみにしもてゆくほど道理にもたがひて、よにびんなきことなるべくれもはるゝすぢなれど、わりろめつるわがこゝろにひかれて、ねもれもひあらためで、とかくれもひめぐらすにまかせては、いつのよにも志かわりしぞかし、たれもさわりしぞかし、などろのことかのことなど、よきためしにもあらぬことを見するぞげによろしかりける。旅にてはならはぬこるして、ものすなるは何のたけきことにかあらん。わろくゆがめる定規を志ひてれもひよするにぞありける。またよろしき例をもひがごとするものゝわがためよきやうにしひごとしてひくことあり、こは定規はなほくてものたつすべのあしきたぐひなり。このひかでとはものしり人の中におほくはあることぞ、心すべきことなりかし。

かわい子には旅をさせよ

ちゝ母のあまりにかなしうのみして、ねのがまゝにねはしたて、しぞしもかたはらさけずなぞしたる子は、ねぞりならひて、たはふれあろびをこのみ、がくもんなどに身をくるしむるやうなることはねせず。世の中の人のたゝずまひも志らず、よろづにおもひやりなくて、あしき人になるものにしあれぞ、ねやの心すべき事にて、旅などにもいだしやりて、をり〳〵からき目ものよとて、やくなきあらろひも出くるを、さるをり

とのみにて、たへがたきふしもおほかれど、まづしき人のうへもかくこそとおもひやられ、よろづものこゝろぼそくて、わがたのむ人のこゝろにはたがはじとして、すべて人とまじはるにこゝろうつくしくなさけぶかくものおもひしるやうになるものぞかし。されど大名につかふるひとも久しく江戸にまゐりをりてかへりたるは、大かたあるべかしうしめやかに、なさけぶかく、國にのみをるはところにつけては、ものゝふとていきはひいかめしくけしきとりつゝ、したがふひとのおほかるからに、おのづから心おごりしてあはれになさけ〳〵しきはまれなり。

らくは苦のたねくは樂のたね

田はたけなどあまたもたるものゝ、やつこをおほくつかひ、人やとひなどして、つくるわざせさするは、かたへよりはいとやすらかに見ゆれど、こゝろづかひをやらぬ日もなくて、なか〳〵にくるしく、薪こる山人のあしたには小篠のうへの霜をふみゆき、ゆふべには谷のあらしのさむきにかへるなどは、いと〳〵くるしげにみゆれど、こゝろはやすく、身のやまひのうれひもなく、をり〳〵にはほど〳〵にあそびたのしむ事さへありけり。國のまつりごととるわざなども、ものゝくま〴〵までことゆくやうにせんとて、そのことはたがあづかり、かのことはなにがしと、ことおこなふ人をあまたになしたらんはじめは、たらひてよきやうなれども、おほきにつきては、かへりてわづらはしきふしよからぬ事もいでくるぞかし。いにしへ天平のころには、みことのりありて、國々の郡のつかさなどかずすくなくしたまひしも、さるゆゑにやありけん。そのかみはしもざまのことをかみがかみにくはしくしろしめし、御めぐみのすぢなどもことにひろくゆきいたれりけることをおもふべし。ものまなびするもさやうにて、みづから筆とることをもものうがりて、人にか

かせてはことゆかぬふしおほく、あるはたがへもして
なか〳〵にいとまいることいでき、又まづしくてすり
まきなる書をもえかねて、人のをかりてうつしとり
て、よむ人などはたよりあしげなれど、しかするがす
なはちがくもんのちからとなりて、はやくすゝむなど、
みなおなじことわりなり。

ならはんよりなれよ

たとへばゐなかにかよふあき人などに、みやこのもの
いひをひとつごとにとひきゝて、ならひうつさんとす
る人のあらんに、いかにちからをつくしても、かぎり
あれど、ことゆかぬふしのおほかるを、みやこにのぼ
りをりて、一とせ二とせとすぐるほどにはおのづから
そのものいひにうつることのわざと、とひきゝならひ
たるにはまされるがごとく、今の世に役人といひて、
ことゝりおこなふ人などの、はじめに其おこなふすべ
をとひきゝて、おぼえんとするよりは、おなじつかさに
まじりゐて、見習ひたらんは、こまかなるあぢはひま
でもしりえらるべきものぞかし。又ものまなぶも歌よ
みならふも、おなじことにて、ひとりふるき書のちう
さくともよみ、歌集を見ておもひわきまへもし、よみ
ならひもせんとするよりは、友の中にまじはり、その
すぢのまとゐのむしろにいでゝ、とかくしたらんはす
ゝむことのはやかるべし。

（未完）

おきの玉藻（八）

永石德文

妻女の道

妻女の道正しからざれど、國ほろび家ほろぶる事、昔
より數多し。殷の紂王の妲巳、周の幽王の褒姒等なり。
くはしくはそれ〳〵の書につきて見るべし。これらは
皆國をみだせし人々なり。世間に家をほろぼす妻女多

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くして目前にあれど、のするに及ばず。女は内ををさむるが役なり。よく正しきを賢女といふべし。宋公の婦人に伯姫といふ方、ある夜御殿に火事出來たり、人人皆にげちりしに、一人の臣下伯姫にとく出給へといひけれど、女の禮義二人つれざれど夜はあるかぬ法なり、とて出給はず。つひにやけ死給ひけり。この外貞女は兩夫にまみえず、とて入江に身をなげむなしくなり、高行といふ女は鼻をそぎてつひに二夫に嫁する事なし。令女は二つの耳を切、李氏は臂をたち、盧氏は目をくぢりてすてしとなり。かやうの賢女は名も高く、末代のかゝみなり。佛も夫婦の正しくて、家ををさめ親によくつかふるをば、在家のぼさつとほめ給ふなり。妻才智なれど夫のわざはひすくなき物なり。夫のあしきをばかくし、よきをばあらはし、六親をよく和合せしめ、いやしき夫にてもよく從ひたろれて貴く見する也。家のさかえおとろへは、妻の善惡による物なり。

有書にいはく、巳より富る人の娘を妻とすべからず、かれらの富貴を心にさしはさんで、舅と夫をかろしめ、我心に奢有ゆゑ、家のやぶれとも成事有て必ほろぶるもの也。惡敷妻なれど夫もわざはひにあふ事多し。つねに夫の惡敷をかたり。人にもかろく思はせ、我もいやしみて少しもおろゝ躰なく、家内をみだすもの也。貧しく成ては、夫婦の口論たえぬゆゑ、親もうれひれはし。夫婦は一同に孝行なれど、親の心もたのしき也。　（子孫寶草）

からの例のみひきいでたれども、ことわりよくあたれり。日本の神國に生れながら、かの國の人におとるふるまひありては、いかゞはせん。ふかくかへりみいましめてつゝしむべきわざなり、行をつゝしみ心をはげまして、國の光をかゞやかすべし。女なりとて自ら棄つべしやは。因循と謙遜とをとりちがふべからず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女の性

女の性は皆ひがみたる物也。人我の相ありてわづかの事にもいかりて顔色わかくなり、貪欲ははなはだしく、耻をも忘れ、我身を愛して人へは邪見なり。いつはり多くして詞をたくみにし、くるしからぬ事をもとへばいはず。扨は思慮ふかきかと思へば浅ましき事までもとはすがたりにいひ出し、たばかりかざる事は男のちゑにもまさるやうにて、しかも人に見すかさるゝ事おほし。物の隣れをしらず、又少しの事も人をうらみ、人の噂をいひてつねのなぐさみとし、へつらひかざるゆゑ、損多く、堪べき事にはよわくして、よわかるべき事には我慢をおこし、短慮未練にして行末のかんがへなきもの也。女の性はかく拙きものなれども、夫のかしこきは女もかしこくみゆる也。夫の位高ければ女も位高く成ものなり。松たかければ藤も千尋をよづるがごとし。（同上）

かくいへども、これを一般の女性とはいひかたかるべくや。賢女もなしとはいふべからず。かゝるは下ざまの女なるべし。これにかんがみて、かゝる淵におちいらぬやう心をとゞめ、おちいりたるものをばすくひいだすべきなり。下ざまのものなりとて他國の人にあらず、おなじく、我國の同胞なり。傍観してのみすつべきにはあらざるべし。

友をえらぶべきこと

女はあきらか成鏡にてかほの善悪を見べし。人は良友に身の善悪をとひてしるべし。悪敷を見て人よりいさむる事あらんに悦て聞、身持をなほさゞる人は悪敷病を持て、療治をきらふがごとし。又あしきを見ていはざるは、誠の友にて有べからず。扨友を求めんと思はゞ我よりすぐれたりと思ふ人をよく見てつねにしたし

みまじはるべし。我に似たる人を友とする事は、益なき事なり。我はもとより拙き故なり。すぐれたる人にまじはらずは我身なほるべからず。況や我よりおとる友ならむはやく遠ざかるべし。なきにはおとりてつひへ成ものなり。いにしへの人は友とまじはるに心信をつくして、朋友には命をもをしまぬほどの仁義なり。今の世の人は面のまじはりをむすべども、心はまことの友にあらずして、多くはあだと成事あり。はるかなる道を行は馬の力のつよき事ある、がごとく久敷友とまじはりぬれど、心に信なき事ある、なり。扨友どまじはるには始めてあひし時の心を持てつねぐみだれずむ、老後に至る迄互ひにうらみあるべからず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

こゝろれきて

家は金殿にあらず共、雨もらざれどよし。衣服は錦にあらずとも、あたゝかなれどよし。食物は珍膳にあらずとも、ひもじからざれどよし。妻はかほに色あらずともかしこきをよしとすべし。周禮に曰貧にても心きよけれどつねにたのしみあり。富ても心にごりて親子兄弟夫婦の六親不和なれど、常にうれひ多くして、心ぐるしき者なり。

（同上）

弟橘媛の清節

金子薫園

鳥がなく吾妻の國といへど、人はその關東のことたるを知らむ。さて、とかく關東をあづまの國といふこととなれるには、古く故あることにして、後の人の涙の種となるぞあはれなるや。

白鳥の御神と齋かれ給へる日本武尊の御上のことは、今更說きまつるまでもなし。その西の方熊襲を討たせ給ひ、東の方蝦夷をことむけ給ひし御いさをは、誰か仰ぎまつらざらむ。げに皇子の、幼きころより、西征

東伐の辛苦をなめさせ給ひ、金葉玉枝の御身もて、戈を枕に、兵馬の間に盡瘁せさせ給ひ、凱旋の途上、はからずも、膽吹の瘴氣に中りて、むなしく能褒野一片の露と消えさせ給ひしこと、今の世より推し奉れど、いかばかり殘をしくおはしましけむ。今はの時に、「はしけやし、我家の方ゆ、雲井たちくも」と叫ばせ給ひし御言葉を見ても、その故郷にかへらで、この世を去らむことを遺憾におぼし、御心は知りまつるべきなり。

皇子の尊は、かくも都を慕ひ給ひき、されど、これにも劣らず慕ひたまひし人なきにあらず。碓氷峠の上にて、吾妻はやと歎かせ給ひし御心の中や如何なりけむ。その吾妻とは誰が上ぞ。やがて、弟橘媛の御事なり。弟橘媛は、穂積氏忍山宿禰の女にして、尊の妃におはしき。尊、東征し給ひし時、諸共にその軍に從ひ、憂きを一つにし給ひき。尊、神劍の威靈によりて、向火の難をのがれさせられ、上總へ渡らむとて、走水の海をわたります時、海荒れ浪起りて、あからしま風つよく、御船の進まぬのみかは、やがては、覆りぬべくなりたり、抑も、尊は、畏くも父帝の仰を承りて、東の夷を討ちきためむの旅路なれど、今こゝに舟と共に海底の藻屑となり給はむは、いかにも殘りをしかるべく、且は父帝の叡慮にもたがひ、夷どもをして、猶、一きは皇國に仇し奉らしむべき事なれど、この折の船の中の人々の心は、もとより、尊にありては、いかばかり恨めしくや思しけむ。されど、さかまく浪は、いつ靜まるべくもあらねど、人々の心の中は、思ふに千々にや亂れけむ。唯、舟の漂ふまに〳〵、風のふきけるままに、任するより外なすべきこともなかりしならむ。げにや、この危かる時にしも、身を捧げて、國の爲め、尊の爲めに、盡しつる人はありけり。弟橘媛は、今しもをのゝき戰へる人々を、雄々しくも制して宣ひつら

くゝかゝる荒浪にては、身の助からむこと思ひよらず。さはあれ、この難は思ふに綿津見の神の御怒にふれしことあればならむ。もしかくして過ぎむには、全き軍も失はれぬべし。かゝることあらむには、都にましまず帝に對して何のことぞかあるべき。苟も、國の爲め、君の爲め、軍立たせる背の君に、不慮の難あらむは、嘆かはしきことのかぎりなり。罪ありとならば、妾、背の君に代りまゐらせむほどに、背の君は、軍の功を終へて、恙なく都にかへりませ。これ妾が心の願ひなりと、いと懇にいひいで給ふに、人々涙をしぼりて止め奉り、尊も死なば共にと誓ひつる妹を、いかでか唯一人先立たせむとて、心をせめて口說き給へど、媛の御心や定まりたりけむ、露しも肯なひ給はず、菅疊八重皮疊八重絹疊八重を波の上にしかせて、さらば許させ給へよと、いひもはてず、逆まく浪へといり給ふ。人人あはやと見奉れば、媛は波間に浮きつ沈みつし給ひつゝ、やがて、こなたを見給ひて、

さねさし相摸の小野にもゆる火の
　　ほなかに立ちて、とひし君はも、

と尊を慕ひ給へる御詞の末も、やがては、打つ浪に聞えずなりしが、媛の誠や通じけむ、海原は忽ち平になりて、尊は恙もなく、上総にわたりつき、奥州にもいたりて、あらぶる夷を平げ給ひき。

げに、媛がよく尊につかへて、妹脊の道をつくし給ひしことは、いはずもあれ。危難に臨みてもなほ尊の上を思ひ、我身を抛ちて、夫を救ひ給へるその操の高き、誰かはたゞへ奉らざらむ。まして、その一死、よく東夷征服の事に與りて大に力あるを思へば、啻夫に對して貞女なるのみならず、國に對しても亦忠婦とまをすべきなり。

あはれ、國の爲めとはいへ、居ながらいとしき媛を失はせ給ひし時、尊の御心は如何なりけむ。都を立ちい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で給ひし時は、一人のみかへらむとは、思ひ給はざりしならむ。漸くこの海まで率て來ませしものを、わざと別れ奉るべしとは、また思ひがけ給はざりしならむ、かゝれど、尊の御心は、常に媛の上をのみればし給ひ、東夷平定の功をとげられたるにつけても、媛のあらでと、折にふれては、思ひいで給ひしならむ。されど、都へ凱旋の道すがら、碓氷の嶺（紀による、記には足柄坂本とあり）に上り立ちて、遙に相模の海を望みて、懇に、吾妻はやと詠歎し給ひしも、實に御ことわりにこそ。

あはれ、吾妻はやと仰せられし詞、言は短かゝれども、その心はふかし。媛を思ひいでゝ、憂に沈み給へる尊には、この詞のみさへ猶、長かる心地やし給ひたらむ。吾妻といふ詞は、實にかくも悲慘の歴史をもてれど、關東に住めらむ人は、いはずもあれ、その名をきゝ、そのよび名を知れる者は、日本武尊の御嘆を偲び奉ると共に、媛の夫の爲め、淸き貞操をつくし給ひしことを忘るべしやは。

春の風さゆくれて、點滴聲ある、上野山にて打ならす時の鐘を耳にしつゝかきをへぬ。

和泉式部と小式部の内侍の墓

松廼舍主人

房州鏡浦に勝景多し。館山を去る里許の邊に那古といへる所あり。名高き補陀落山のある所、古老の言に那古とは元拘那含の里といひ、拘那含佛說法の地なりと言ひ傳ふ。補陀落山は海數十丈に突立し、怪巖奇石天然に虎踞の如く、其上に松柏鬱茂す山腹に大悲閣あり。圓通大師を祭る。養老元年中、行基菩薩の草創なり。其麓に寺あり、那古寺といふ。太古は塔數十頭ありて、田圃を有し、殊に維新前までは、八幡の鶴宮とて鎌倉の右大將賴朝公の鎭座にかゝる八幡大神の別當たりしかど、國内屈指の巨刹肉山と呼ばれしに、今は星移り

物換りて、また昔日の比にあらず。口碑に傳ふ、此寺に和泉式部と小式部の内侍の墓ありとて、鼎形塚二個ありし、其處は觀音堂の上舊寺地と稱する平地なり。之に付、其筋の修史局員某氏、昨年當山に來り、住職に乞ひ、此墓地を搜索せらる。其某のいはく、四國の阿波にも補陀落山あり。矢張眞言宗に屬す。先年彼地に至り、實檢するに墓地にあらざるを看破せり。いま當山の地を見るに、眞に塋域たるを追想し得るに於て更に疑ひなし。且和泉式部が遺言書に「安房補陀落山へ送葬せよ」とあれば當地なること誠に明白にして、又房州長狹郡にも和泉村といふ村あり、兎角當國は何か式部に緣ふかき者ならんと、然らば京都にある京極和泉式部は如何あらんと、世の考證家の參考にもならんとおもひて、あるかまゝ。（信正誌）（佳山幾子寄）

つみ草

草のや主人

梅の花のたもと、なほうらさむく身にしみてればねたる東風も、今は、いつしか名殘りもなく、吹きあらたまりて、うら〳〵と空をのどめて、うちなびく春霞。うちわたす野くれ山くれ、一つののどけさに、ほの〴〵にほふ春日かげ。雪まぜにむら〳〵見ねたるわか草も、なべて濃き緑りの色に成りぬれど、今こそ來れ春の野邊、都のうなゐ少女が手籠たづさへて、昨日も草つみくらす向ひの野邊、今日もまた絲遊と諸共に。あな面白の春のすさびや。鄙にも、よも木さわらびに、小松がくれやにはふらむ。

菫花はやさし。茅花はゆかし。れんげはうるはし。紫に紅に緑りに、れいさきの色もふかく、しかも塵も染まず淸げなる春の若草、つみはやすうなゐ少女に似たるもゆかし。げにころやさしきうなゐ少女の伴れとも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すべく心ともすべき春の若草、いざゆけ、いざやつめ、いざや遊べ。さはいへ、霞に道な忘れたまひそ。宿を霞のよそにのみ見て、父母な忘れ給ひそ。さてもまた、此の美しき春の野に、此のうつくしき花をあつめ、かくうつくしき春の遊びにつけても、うつくしき君のみ惠な忘れ給ひそ。

わらひばなし

薫風仙史

入智惠の失策

今はむかしのことなり。男ありしが、男ざかりになりぬれど、嫁をむかへんとて、うからやからよりあたりの人々までいひさわぎけり。さてその日にな



りて、そのむこなかうどなど數多人うちつれて婦の家にいたりてこなたの人々もさきの人々も一ツ席にまとゐして、酒などくみかはせり。冬の日にて風などふきすさびていとさむき夜なりけれど、火桶數多に炭をさかりにおこして、こゝかしこにくばりて、人々手などあたゝめてけり。さて火桶の炭ヒシ〳〵とはねて、その火とびてむこの膝の上にとまれり。むこあわてゝ「この衣はわがにはあらず借ものなり」といひつゝもみけしてけり。かたへにありたる人、ひそかに聲をひきくしてそのむこにをしへていへるは、借りものなりとないひそ。かゝる衣はわが家にはいくらもありといへとをしへけり。さてしばしありて、又ヒシ〳〵とはねて、こたびは火むこの鼻の上にとまれり。むこはその熱きをも、こらへてほこりがほにいへるやう「かゝるものはわが家にはいくらもあり」といひけるに席こぞりて腹をかゝへてわらひどよめりけりとなん。

おさやうの糸

これも今はむかし、人にあひてものいふすべもしらぬ人ありけり。人の家にゆかんとするには必ず人一人をつれてゆきけり。常にはそのつれたる人にのみ物いはせつるが、えさらぬことありて、おのれいはではえかなはぬことあり、そのつれたる人、はかりていへるやう、ぬしの衣の袖にひそかに糸をつなぎおかんに、その糸をひきたらんには、必ず「おさやう」〳〵といひたまへといひをしへてゆきけり。さてはじめのほどはそのはかりしが如くうまくいひたりけれど、しすましたりとおもふほどに、さきなる人いかにいへども、いらへせぬに、さきの人あやしさにたへずして、いかゞしたると問へど、「たゞ今おさやうの糸きれたり」と答へけるをきゝて、はじめてそれとさとりて、これも腹をかゝへたりとなり。

野寺の墓

（と）　　石　棒　青　苔

光陰矢の如しとは誰がいひろめし言葉なるらむ、頼みし夫はいづちいにけむ、三年の契たゞ一夜の夢ときゑて、ふすまもる風の寒さに寐ざめ勝なるこの夜頃を、この夜に限りいぎたなくも、暁の鳥に驚かさるゝまでしらざりしは、抑いかなる宿世なるらむ。千代と契り八千代と誓ひし夜のことは、なほ目の前にありながら、あらずなりゆくころ悲しけれなど思ひつゞけて、かひなき歎きに沈み勝なる雪子の身にとりては、中々に冬の日も短かからず、ましてあらぬ夢破れては又結むれず、漸うにあきらめても、理しらぬ涕は夜な〳〵枕をひたさずといふことなし。あはれこの心誰にか談らむ、ぬしの面かげをうつせる子はこゝにあれど、見しり聞わく年にもあらず。さてもぬしは今いかなる家にいかにしてかまさむ、わが此心よもしり給はじ、一ことしらしたしさなり〳〵いざしらさむ、とはいへいづこにますともしれぬものをいかになるべきぞと、とさまかうさまに思ひわづらひつゝ、戸おしひらきて立出れど、木葉はみな散りはてゝ、常盤木のみ物淋しげにたてるに、耻かしや髪もかたちもみだれてやつれし姿地にうつれり、仰げどくまなくすめる月、なれのみは嬉しき袖にうつらで悲しき袂にやどるらむ。さても泣聲のきこゆるは金一や眼覺めつるとやをら又立歸れど、又もや聞ゆる彼方の森かげ、さてはやあしき鳥の音か、さても其聲の悲しきはなれも親をや失ひし、はた夫にか別れにし、何につけても思ひまさるもののみ。あはれ〳〵父はなくなりぬとも母はかく思ひになやめりともしらでか、さても〳〵うらやましげに眠れるものかな。

（ち）

愛宕天神の年の市もいつしかすぎつれど、いまだ年は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同じ年、しかもたゞ一月となりて、市街の巷々には、春まつ商人の所せきまで立ならび、今日を限の聲を出して、わが物こそよけれ、わが物こそ安けれと競へり、前おふ聲とともに馬かけたる車の音からくと響きわたるに、いかめしき衣着よそひ勳章胸も所せげに輝きわたるは、大宮にまゐるなめり。いづれ勇ましくうれしげならぬはなきを、父は例の懸乞にや出行きけむ、母は家のことやいとなかるらむ、山なす青物の中にたゞ一人力なげに、聲もたてずおもひに沈めるは雪子なり。去年の今日は樂しとにはあらねど、なほ大根などあすの羹にとて鶴よ龜よといはひつゝきりたりきさるを今年は共にと思はむ樂もなく、芋の子のひきちぎらるゝを見てもわが身にくらべられ、齒がための堅からぬ契、堅栗のくりかへしてもつきぬなげきに、鏡餅の鏡にうつるかげのおとろへつるを見るも涙の種など思ひ入りては、物買ひに來る人にゑましげなる世辭の一言もかけず、夜に入りても雪げの雲の空さむく今にも降來むとするに、泣く子かゝへてなほ守りてゐるに、人たちさわぐ彼方を急ぎゆきすぎむとする人を見て俄に勢だち、しかも家の樣顧みつゝいそぎ立よりて、わが夫とひくけれど力ある聲によびとめぬ。處こそへだてたれ、思ふまゝには物いふこともならね、心のみはいつも通はぬことなく、昨日の思ひにくらぶれどいとうれしく中々に父母の許に居給へど、隔てし心より日は終日夜は終夜、いづれを見てもふつくみたる面持のみなるに、傍に見る目のいとつらかりしよりも中々に心やすく、忍びやかに其消息をもきゝ、わが事はまづさしおきてかはゆざかりの金一のこと、しのび〳〵にしらするを命として此上なう喜ばしきことにおもひおくりぬ。さてもいかにしても本の如く、ともに〳〵憂苦をも快樂をもする身にならばやと思へど、公けにいへばとてとても許さるべくもあらず、さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ては金一を伴ひて忍び出でゝゆくべきか、頑なゝる父君いかで其儘すておくべしや、必ずもとめいでゝ引さかむ、さることになりてはいよ／＼むつかしくのみあらまし、いとしけれど彼も今は乳をはなるともつゆさとりもあらじ、とはいへもし今母に別れてはいかなる憂目をか見む、されどよそながら見てもやらで育たぬことよもあらじ、さては両親の許をもうけてわが身のみゆくべきか、さてもなはいつぞやの如く、あの男に添ひとげむとならでわが家に足踏はせさせぬぞ、わが家とは夢にも思ふなとくれ／＼もいはれしが、又必ずいないで給はむ、さてはあれをおきてゆくも氣がかりなり、さりとて今彼をつれてゆかばわが家の跡目は絶ねはてゝ、さばかりいろしみ給ひ人にとかくさたせられても顧みもせずて、あまし給ひし金子は何となるべきぞ、それのみかまづ家を絶つことわり、よし他より子をならびて貰ひうくとも誠にはことも跡のたゆる理、それよあれはとにもかくにも殘しおきてわれ一人いづべきぞ、それにはあらむほどの策をつくして。

（つゞく）

落花　　柴田千稲

第三　御懐しう候

暫くして女は、顔に亂れかゝりし髪を掻上げ、力なげに頭を擡げて、瀧の如くに漲り落つる涙の眼にぢつと若武者を見詰め、やがて側近く身を寄せて、又耻しげに外向けたる顔には、頬よりかけてほんのりと紅を潮して、さながら露に悩む櫻の花の朝日の光に匂ふが如し、かくて漸くに云ひ出すやう、御懐しう候　親家殿、和君は妾を見忘れ給ひしかど妾身は如何で見忘れまつらん、晝は空のみ眺め暮し、夜は夢か幻かの内に迷ひて、僅一時も忘れまつりし事もなく、如何にして暮

し給ふらん何處におはしますらんと、月頃日頃慕ひまつりし甲斐ありて、今宵かくゆくりなくかゝる所にて逢ひまつりしは、年頃乞禱みまつりし神佛の引合せ給ひしに候はん、此長き年月の間何れの地におはしましつるぞ、御身に變らせ給ひし事はおはさゞりしか、見上げまゐらすれど勇々しき其御出立、此頃此處彼處にありしと聞きつる戰の場の、腥き風雨の内に馳せ給ひたりし其御姿、幸ひ敵の傷手も負ひ給はずして、思ひもよらずかく逢ひまつりて御無事の御顏を拜みまつるにも年來の憂き悲しみは雲井の煙と消え候ひしぞかし。何語り申すべき事も多く問ひ申さん事も澤に候へど、いざ内に入らせ候へ。我身の外には人も候はねどと、流石に女心の嬉しさに堪へ兼ねて、屡々落ちくる髮をうるさげに掻いやりつゝ、いろ〳〵と上にあがり、明滅したる燈火を搔き立てゝ、取亂したる物具を片寄せ、いざ此方へと、又庭におり立ちて手を執らんとかりに勸むれど、若武者は答も爲さずして首を垂れたるまゝ、無心の像の如くに佇立み居りしか、やがて悵然として大息し、力無氣に歩寄りて床にどつかと腰を打掛け、腕を拱きて又頭を垂れたり。

女は怨めしげに下より若武者の顏を打仰ぎ、暫し躊躇ひてやがて聲を震はして、申すも耻かしき事に候へど、幼き時に父母の許を受けて、末は妹脊と堅く緣を結びしより、年長け行くにつれて、今日か明日かと御側にかしづきまゐらすべき日を待數へ居りし甲斐もなく、或日君は俄に家出し給ひしとの報知を聞きはべりて、夢かとばかり驚きて暫しは物も覺えざりしを、父母に慰められて漸う心を取直しゝもの、氣は結ばれ胸は苦しく、只垂籠てのみ味氣なき日を送れるほどに、悲しみはこれのみならず不幸は又も重なりきて、只杖とも柱とも賴みまつりし父母は、共に歸らぬ旅路に出立たせ給ひ、此身は何と爲ん術も白浪の、八百重果なき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青海原、潮のまに〳〵獨り音を鳴く小夜千鳥、悲しき事のみかこたれて、浮世頼み難く、飾をおろさんと思ひたちし事も度々なりしが、思ひ返せど未だ和君の此世にましますものを、若し緣だに盡きずど又逢ひまつる事もありぬべしと、はかなき事を頼みとして身は棄ても得ず世をもえ遁れず、秋の草葉の露より繁き袖を絞りて、かにかくに日を送り候ひはべりしに、或時腹惡しき一人の叔父の、和君に逢はせんといふ詞に欺罔れて、遂に住馴れたる故鄉の地を迷ひ出で、流に浮ぶ浮萍の今日は東明日は西と、憂き目悲しき目に逢ひて、幾度か死なんと定めし事も多かりしを、せめて一目なりとも和君にと思ふ心にひかされて、去年の冬、さらぬだに露けき袖を、降りみ降らずみ定めなき時雨にぬらして、漸う此地に辿り來りしが、叔父の惡しき心は愈々增して、見るもうたてき行は日增に募り、或は旅行く人を脅かして貨を掠め、或は道を失ひし人を留めて欺き殺し、諫め爭へど憤り打擲し給ひ、果は我身を、我身を恥しき遊女に賣らんと云ひ罵り給ふに、最早一時も此世に存へまじと、愈々心を決せしものゝ、又和君の事を思へど心おくれて、悲しきを忍び辛きを堪へ、かにかくに今日迄日を暮しゝに、未だ緣の盡きざりしか、今宵計らず和君に逢ひまつりて、こよなき嬉しさは譬へん物も候はず。喃親家殿妾が心中を御察し給はれ候へと、心の思を半 泪に云はせて、跡は聲さへ消々に、身を震はして倒れ伏しぬ。月影雲に隱れて光闇く、夜は寂寞として只颯々たる風のみ草葉の露を拂ひて冷かなり。

若武者は聞く毎に沸き返る泪を密に拂ひて、いと苦しげなる胸を押へつゝ、俯頭を垂れたるまゝ默然たりしが、愈 斷腸の苦しみに堪へざるものゝ如く、顏は白う蒼白めて脣の色も薄く變り、暫くの間は死默して、僅に通ふ呼吸も蓮の絲の絕え〳〵なるが如し。やがて垂れ

る頭を擡げて、我と自らかよわき心を叱して齒を食緊め、堰き來る涙を嚙みとめんとせしが、あはれ又も頰を傳へる一滴二滴、膝に迸りて玉と散りぬ、そを惶しく甲手もて拂ひ落せしが、思ひ廻せば胸は破るゝが如く覺えて、勵ます心の勢も失せ、又悄然として首を投げ出しつゝ長大息を爲す。

暫し經て後、慨然として立ち上り、兩眼を瞑して頭を打振へば、黑髮は婆娑として兩の肩先に亂れ、鎧の音戞々として響きぬ。

時雨（その六）

白魚女史

わが子のふつゝかなるを、せめもなし給ひて、速にわび入れ給はらんと思ひたる父親は、さのみせめもなし給はず、また、すみやかにわびも入れんともし給はで、たゞ思ふ事あれば、己れにまかせよとの給へるのみ、またいひ給はず、とひもしたまはず。母親は、姆より、事の樣子詳しくきゝとるに、いかりもせられ、なきもせられ、彼の人も、さばかりには、むごき人にはあらざりしを、不具なる子もちたまひたるからに、自ら世にひがみて、さるくねりたる心にもなられてならん。のう文子、其方より出でたるにはなく、彼方より出だされしなれば、祖父樣も、草葉のかげより、必ずや見そなはしてならんに、今は外へまゐるとも、其方の不義とも、强ちは思ぼすまじ。なれば、のう文子。あらためて深見方へは、誠に其方を知れるかありがたからずや。道知らぬ非道の人に引きかへて。のう乳母や。そちはとむけ給ふ言葉に、何かはためらふべき。乳母は、げにも〳〵、申すことの候ふべき。のう孃樣、御心も御姿も、めでたうすぐれて生れさせ給へる御身をあのやうなるきたなき、胸わるげなる處に埋め給ふ事のあるべきか。母君の仰せこそ、乳母もすゝめまゐらす處

なれ。世の中はとかくまるかれとは申すなり。角たちて頑固なるは、世のまじらひにもれくれ、自ら不幸に陥るもとになどゝ。誠の道をたのしむと云ふ事を知らぬ婦が心、よく／＼れもへど、にくむべきものにもあらず。これもかれも我を思ひてころとれもへど、いづれをきくも思ふも、たゞ涙にて、心は千々にみだるれど、五月ならぬにかきくもる窓のはとり、祖父がうゑたる卯の花のかたみの色もなつかしく思ひ出でられ、久しくよろにのみなれる御墓、せめては香花なりと手向けむやと思ひて、垣ねの花一枝二枝折りたるを袖にして、獨りたづぬれど、あとはなほ苔さへむさず、むかしのまゝのかげは變らぬものを、われは／＼、かひなき身の、はや誓ひし事を徒らにせんずるかと思へど、あか井の水の淸きたもとにうつる、わが影もはづかしく、まことの花は供へても、誓ひは空しき心の手向、亡き靈魂は、何とか思ばさん。此の秋の一週期には、眉もおとし、齒をもろめ、あらど、小さきものももろともに、御墓の塵は拂はむと思ひしものを、思ひきや、姑の心にさからひて、今日は女子の數にもはづれたる身、嘸やいまはしくも、にくゝも、くちをしくも、孫にはあらじと思ばしめさんが、祖父さま、ゆるさせたまへと、生きたる人にものいふごとく、ゑどしつく／＼とながめたるが、いつぞやは、まぼろしにさへ見ゑ給ひしものを、今日はそよとの御答もせさせ給はぬは、いよ／＼あさましきものと思ひ捨て給ひてか。悲しや、祖父樣のうかなしや。孫やと一言を祖父樣と、御墓の石に取りすがり、よゝとばかりに泣き沈みしが、何思ひけむ、ふと涙を收めて立ち上りしが、またふしまろびて、よゝとなき。祖父さま、佛の御弟子となりてころ、わび奉るなれ、行末は一つ淨土、孫や來れと誘ひも導きもたまひてよと、泣きつ、くどきつ、やうやくに、思ひかへして立ち上り、草ふみ分けて、幾町か

行きしが、ふと目に見ゆる母親の面影、心にうつる涙の顔。さるにても已れ人と生れし甲斐には、たゞたまぼこの道の一すぢをたどらんものと思ひがけしに、今ろの第一なる孝子とえならねど、貞女ともえならず。天は、など、此身をかく不孝不貞の身となし給ふならん、如何なるふかき罪業ある身ぞや。今、たとへ、身をかへ、佛の御弟子となるとも、母をなげきの淵にも沈ませ奉りなど、いよ〳〵罪業の消ゆる時こそなかるらめ、さりとて此まゝに歸へるとも母親の心を慰むるにはあらじ。いふ甲斐なき身や、神は、など妾を、此やうのあさましき人と、生みもつくりもせられしならんと、はては頼まんとたもへる佛さへ、神さへうらめしく、涙さへにかき亂るれど、道芝さへ心ありげに露重し。たぞや、あやまちぬ、數ならぬ身の、如何に思ふとも、分く方はなきに、何事も父君の思ばさんやうに、まかせたらんが子の道と、また思ひかへして、元の道へ歸らんとすれど、いつしか、道さへ迷ひにけん、行けども〳〵、こし道へは出でず、山里のたやすくきく人もあらねど、いよ〳〵途方にかきくれてたゞずめど、うれしうも彼方へかすかなる柴がきのかげ見え、松にかよふ讀經の聲、女子のわざか、音も細くたえ〴〵。あはれにればえつゝれとなひて道とはんとすれど、答へなく、讀經もやみて、なきしづむ女子の聲。いよ〳〵身にしみて、聲ある方に尋ね入り、事の由など尋ぬれど、此里に年久しく住めるなるが、母なる人の十日どかり前にみまかりしに、かなしくてかへらぬ事と知りつゝ、かくはむせぶなり。里人のひきとりて、世話せんと云ふものもあれど、よしあるものゝ娘なれど、人なみの夫ならではと、母がありしをり、常々の御仰せなれど、例へ、ひとりも住みはたさんともと思ふなりとて、あとは言葉もなく、柴がきにむせふ山風のみ音たかし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



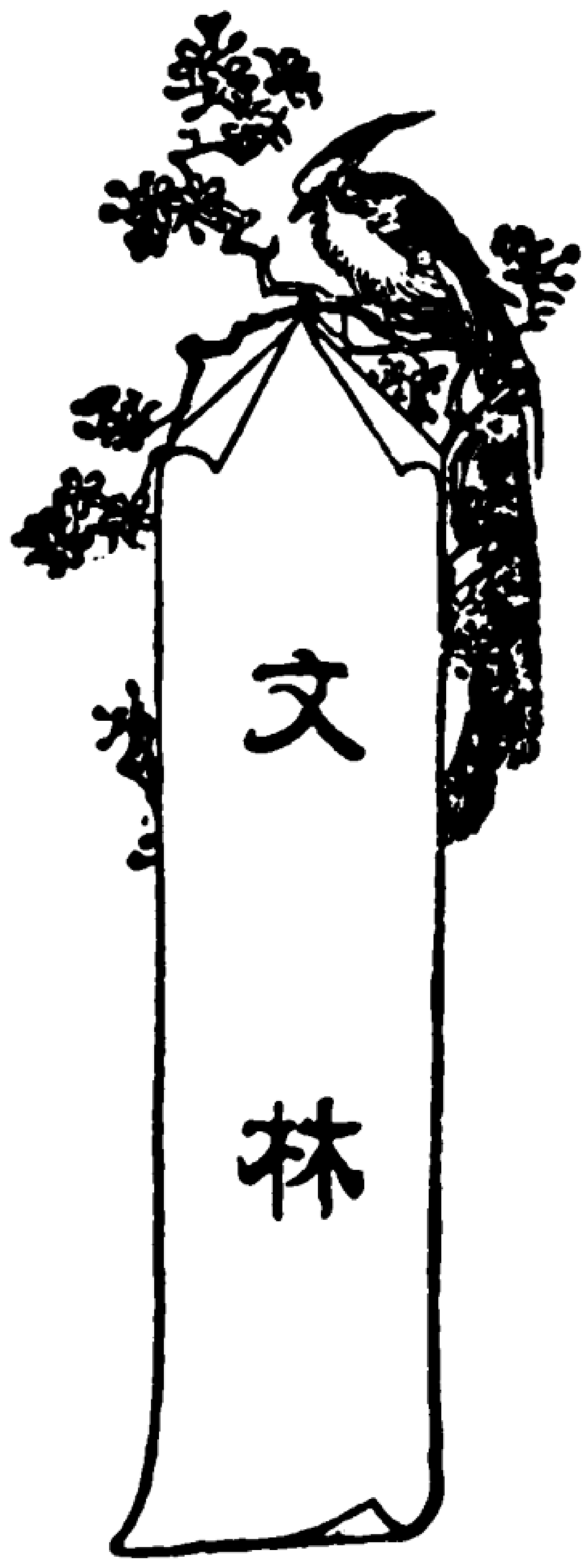
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文子はあくまでなさけふかく、まご心ある女子なれど、此女のことを聞くに、いとゞあはれにればね、今はわが身のなげきもわすれて、いろ〳〵になぐさめ聞ね、さまゝ〳〵といたはりとへど、また思ひきや。此女子は文子が二つなき敎の師の家につかへたる女の童の生めるにて、師の君の子なりけり。そは師の君の若かりし折り、まの松山のふかくも、ちぎり給へる女の童のありけるが、うき世の原の言ぐさの、さりがたき事ありて、その女の童自らいとまを請ひしが、後五月ばかりたちて生みたるは、此の少女なり。師の父なりけるもとを去りてより此里にうつり住みて、親子二人、かすかに今までは住まひまつるなり。文子も、師の君のいまはの折り、御身のみはと思へど、我子をれきてたのむになむ。世にめぐりも逢ひたまはゞ、力ともなりてよとの給ひし事ありしが、身のうき雲にかきくもりて、日來は忘れ居たる事のあさましや。さるにても思ひきや、御身が我が師の君の形見、しかも今此處におはんとは、思ひがけき、さるにても母御の御心を初め、御身の心のいさぎよさ。此君ならで、人も、妾よりまさりて思さん。今よりは力をも、心をもそへまゐらせんに、さなわび給ひそ。自らが思ふ事侍り、まかせたまへとてなぐさめてはわかれぬ。

さても其後深見貞三は、文子に二つばかり年まさりたる妻を迎へ、文子も、また、江口方へ歸る事となりしが、姑なる人も、もと心より文子をいとひしにあらず、あたら花を人しれず散らさんがをしとての心よりせしなれど、文子が二つなき赤心に、泣きてよろこびしとぞ。後一年ばかりありて、江口丹仙と云ふ畫師の名、世にいとゞたかくなりしが、世の人其畫師を見し事なく、逢はんと云ふ人あるもあはざりけり。（終）



海邊霞　佐々木高行

春がすみたなびきわたる朝なぎに
れきこぐ舟もゆたに見えけり

霞添山色　毛利元德

けさ見れば雪にやつれし山のはを
春にかへしてたつかすみかな

早春雪　近衛忠煕

花をこそこゝろにいろげ春たちて
またぬに降れるけさの雪かな

雪中鶯聲　鍋島直大

雪きえぬ枝に木づたふうぐひすの
聲ものどかにきこえけるかな

岡若菜　高崎正風

わか菜つむひとこぞりせむ吾岡の
雪にはいまだあとなからまし

河上春月　松浦詮

隅田がははなのこづゑをもれ出て
なみまも匂ふつきのかげかな

霞中梅　毛利元敏

春風のかをらぬかたもなかりけり
梅さきぬらしかすみがくれに

雨中梅　水野忠敬

梅のはなにはふ垣ねにれともせで
ふる春さめぞのどけかりける

若菜知時　諏訪忠元

さえかへる風さむけれどはつ若菜
春と知りてやもえいでにけん

森鶯　宮地嚴夫

をりよくも朝まうでして聞にけり
　初音のもりのうぐひすのこゑ

田若菜　植松有經

雪きえぬ澤田のわかなあしたづの
　おりゐる方をあさりてや見む

源頼政　三浦千春

うもれ木となかめ捨けむ言のはの
　花はいまこそ世にかをりけれ

海邊霞　大畑弘國

高砂のしまやまかけてきみが代は
　かすみの袖も立ちそはふらん

椿　岡部譲

霜ゆきのつもる艱難やたまつむき
　玉とさくべき本にはありけむ

春雨　林甕臣

北風はきこえずなりて枯れのだも
　あをみわたれり春さめのころ

曉鶯　仝

寢おびれの耳は驚きて覺めながら
　目はまだ夢のうぐひすのこゑ

遠村烟　三輪義方

賤がやのまばらにみゆるとは里に
　ゆふべさびしくたつけふり哉

梅花浮水　安齋篤敬

春風にこゝろまかせていけみづの
　かゞみのちりと梅や散るらん

潛水器を見て　龜谷行

今よりは龍のみやこにあそびなん
　千ひろの底もあさる世なれむ

熊野御前　佐々豐水

よろづよもこゝろのはしら彌高し
　いけ田の水のきよきすがたは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伊豆なりける人のもとに　永石德文

伊豆の海も今朝や霞まんたけ芝の
　浦わもなみのなぎわたるなり

野徑蝶　近衛貞子

春の野にあくがれゆけど樂しげに
　小蝶もわれをおひてきにけり

海邊花　鍋島榮子

磯づたひ貝ひろふだにうれしきを
　さくらもけふぞさかりなりける

山家梅　蜂須賀隨子

花とみしかきねのゆきは消はてゝ
　うめにうもるゝ山のしたいほ

春夜雨　前田朗子

ぬば玉の夜やふけぬらん音もなく
　降はるさめのおとぞきこゆる

のどかなる日濱邊にいつ　柳原愛子

何處まで汐はひぬらんみるめかる
　はてこそ見えねはまの眞砂路

春月幽　小倉文子

咲うめはかすみに消しやまのはを
　かすかに見するはるの夜の月

翫梅花　小池道子

あたらしき年のうたげも梅のはな
　咲をまちてぞもよほしにける

森霞　北島以登子

梢のみおぼろにそれと見えながら
　野中のもりはかすみこめたり

岡若菜　松平健子

うぐひすのはつ聲よりも嬉しきは
　岡べにつみしわかななりけり

朝鶯　小笠原艶子

窓ちかく鳴うぐひすのこゑきゝて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けさも閨をはいでゝけるかな

雨中鶯　税所敦子

春雨のふる日ならずは立ちいでゝ
きかましものをうぐひすの聲

雨中梅　鶴久子

なか〳〵に雨のふる日はすき人の
みにくるれはしうめの花その

雪のふりける朝　遠山いね子

ふり積る雪のひかりにあしびきの
山したいはもとくあけにけり

摘菫　三輪田眞佐子

みゆきせし大原野邊のすみれくさ
摘てむかしのゆかりをぞとふ

雨中柳　内田遊歌子

青柳のねだもうごかではるさめの
そゝぐ庭こそまづけかりけれ

浦春風　安東菊子

さね〳〵しきのふの冬をわすれ貝
ひろふうらわのかせの長閑さ

冬　久後鈴子

埋火もしろくなりゆくふゆの夜は
犬のとは音もさびしかりけり

花下忘歸　安齋御代子

廻り來てそこはかとなく暮れに鳧
花の木かげにやどやからまし

梅見に行る記

木村正辭

むつき十日、けふしも朝まだきより空はれわたりて、いとのどかなるに、いでや葛飾の梅見むとて出ゆく」。先大宰府の天滿宮に詣で、身のつゝがなからん事を乞禱申し、やがて臥龍梅へものしつゝけふを盛と咲みち

たる花のいとしも淸らに日のかげにてりかゞやきたる、色に香にげに似るものなく、うちみるほどは此世のものともおぼえずかし。木だちいとねぢけてこちこちしき枝に咲出たる花のなよびかなるもいとをかし。年ごとに花のをりには必ものしつれど、かくのどけき日にかゝる盛にさへきあひたることは、此三とせ四とせがほどにはあらざりき、我より先にとひきたる人みたりよたりありて、かたへのさゝやかなる庵の中にて、木の芽煮てあそびゐたるまたかたへには若き男と童と腰うちかけてものかきゐたるを、それがむかひなる翁びたる人の、「歌などよみ給ふにやといひよれど、詩つくるなりといらへたるもところがらをかしかし。又やまと歌から歌あるは發句などいふものを、いと點ながにはしりかきして、こゝかしこの枝にゆひつけたるが、いづれもげにと見るはなくて、なか〳〵にあたら花にしもかゝるはとさへおぼゆるかれはかり。さてわれもえせ歌ひとつふところ紙にかきつく、

嬉しくものどけき春のけふの此
梅のさかりにわれはきにけり

こゝを出て北にむかひてたどりゆけど小村井といふところにいたりぬ。こゝにも梅あまたありときゝつれど、立よりて見るにいと近きころに植れはしたりとみえて、木もいと若やかにて、あたりさへわざとつくりなしたるはかへりて見どころなき心ちす、庭の中らにすこし高く岡めきたるところあり。こゝにのぼりてうちながむるに、かの木立とも目の下に見おろされたる、さすがにをかし」かくて隅田堤に行むとす。道のほどおぼつかなかれど、あたりにとふ人も見えねど、心あてに猶北のかたにむかひて川ぞひの道をたどり行に、行ど〳〵いてやらず、ことゝはんとすれど人もなし、道のゆく手には家もなし。されどもとこしかたにかへらんもはらたゝしくて、猶行ほどに、根芹つむわらは

べのうちむれゐたるにかへり。いとうれしくて道をとへば、こは龜ありの里に行道にこそ。隅田堤にはかなたなる畔道を行給へと云ふ。いと口をしとおもひながら、さらにあとのかたへとたどり行ぬ、やゝありて堤路には出たりいとうれし。あはれ書見て誠の道をたどらんとおもはゝよくしりたる人によくとひよく正してこそは行べきことなれ。かくいたづらに行道だに、しらずしてはあらぬかたにふみまよふを、ましてまことの道行むはいとかたきわざなれば、なほざりにはすまじきものぞと、さらにおもひなりぬるも、宰府の神のみちびかせ給へるにぞ、かくて夕ぐれ家にはかへりぬ。



雜報

●聖德無疆　聖恩海の如く、聖德疆なきは、今更申すも畏し、茲に記し奉つる事の如きは誰かは感涙に咽ばざるものあらむ。明治二十七八年戰役に於て、我が軍人が戰地より携へ歸りたる支那馬にて、主馬寮に献納せし者、殆んど廿餘頭の多きに及びしが、夫々經費の定額もあり、飼養料の許さゞる處あり、已を得ず今回民間に拂下ぐるに決したり、さるに畏くも陛下には之を聞し召され、御氣色殊の外麗しからず、苟も出征軍人の戰地に於て辛酸を共にしたるもの、よしや經費の許さゞるあるも、無下に拂下ぐるは、實に献納者の精神を顧みざるものといふべし、其費にして到底裕ならざるあらば、朕が別途費より支出して永く飼養し置くべし、と仰出されしと承りぬ。

●両陛下和歌を好ませ給ふ　今上両陛下には和歌を好ませ給ひて、正月の御題につきて朝野の臣民より詠進の歌、幾萬首の多きに上るを一々御覧せらるゝ由、御歌所の人々、さばかりは御いたづきのほど畏しなと思ひ奉れども、両陛下には御倦怠の御け色さへましまさずとぞ。殊に延喜天暦の御世とはちがひ、内外の御政ごと御事繁きことゝ前古未聞のことゝなるに、开を御覧する御暇々に遊ばさるゝ御製、日ことに幾十首の多きに上り、御歌所に下して御下問あらせらるゝを拜誦し奉るに、御趣向も御調も、凡慮の及ぶところに非ず。御歌所に列なるあまたの歌人、一辭も賛し奉ること能はずとぞ、御藻思のほどこそ難有けれ。

●沼津御滯在の東宮殿下　静岡縣、沼津御滯在中の東宮殿下は、去る九日午前十時御出門、官幣大社三島神社へ行啓あらせられ、御幣帛を納めさせらる。夫れより同社宮司の御案内にて豫て陳列の寶器什物を御覧せられ、尋で境内を御遊覧遊ばし、同時松苗二株を御手植あらせられ、畢て小松宮別業へ成らせられ、午後二時御機嫌麗はしく御歸途に就かせられたり。同日の御隨從は、醍醐、西四辻、両侍從、細川御用掛、外數十名なりしと承りぬ。

●皇太后陛下還御　皇太后陛下には去十六日午後二時十五分、新橋御着還につき、有栖川宮并に同妃殿下を始め奉り、三宮式部長并に同夫人及宮内省の高等官、野津大將以下陸軍高等武官、其他貴族院議員等も御迎として新橋停車場に參集し、御着を待ち受け、軈て御着車あるや、一同プラットフォームに奉迎せり、陛下には玉顔麗はしく直に青山御所に還御遊ばされたり。

●御兼題「懐良親王」　去る五日宮中御兼題の歌は

つくしちの草木なびけし竹園の　　正風
　風のおとこそたかくきこゆれ

よし野山このまをいでし月かげの　　承昭
　筑後のかはにてりわたりつゝ

みいくさの末かなしくも八代の
をのやま深くかくれましけん　通治

ひのくにゝうつし植たるみろのふの
竹もみゆきに下をれにけり　光尊

みよし野の花の盛りをよそにみて
心つくしにすみし君かな　忠敬

わた波をちくこ河原にくだかすは
つくしの島ねにこりはてまし　量弘

君がためこゝろつくしのしらぬ火の
しられずなりし跡ぞ悲しき　隆言

たに山のくさ木も終になびきけり
たけのろのふの風のまに〳〵　愛子

つくしちの竹の園生のさかえなむ
よし野の宮もあれさらましを　敦子

北風にさかまく波もしつまらし
つくしのうみに君したゝすは　道子

北の風にしのかせさへあらけれど
あそのみやまの雲はなびかす　正臣

みよし野の春にもゝれてつくしかた
かへらぬ波のはてぞかなしき　粲

咲にほふまかきの菊のかれしより　有經

北風もなびけかねけんやつしろの
たつたの宮のあともたへにき　綱二

ろのふの竹のたかくも有かな

もとのよにひきかへさんと梓ゆみ
やつしろの城に君はいりけん　正夫

よしの山花さくはるもしらぬひの
こゝろつくしにはてし君かも　胤明

ひのくにの八代の小野の宮柱
たてしいさをぞをゝしかり鳧　英一

●教員検定試驗の志願　來四月中旬より文部省に於て擧行せらるゝ尋常師範學校、尋常中學校及高等女學校各科教員検定試驗志願者は、總計九百三十三人にして、内女子の志願者は僅かに四十五人なりと。

●高等女學校設置　奈良縣に於て高等女學校を添上郡奈良町大字鍋屋に設置し來る四月より始業す。其科目は普通科、補習科、技藝專修科の三科として、普通科　六箇年、補習科は一箇年、技藝專修科は、四箇年と定めたり。而して普通科一年級、及專修科は尋常小

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

學校を卒業せしもの、若くは之と同等の敎育あるもの、補習科は他日小學校敎員たらんとするものを入學せしむる事とせりといふ

●又 日州にても宮崎及太淀兩町村合併して、設立せる高等女學校は愈本年一月十二日を以て開校の式を擧けたり。目下敎員の數五人、生徒は八十三人ありて、追々隆盛ならんとすと、賀すべし賀すべし。

●女子三年生悉く及第す 新潟縣にて、去月女子高等師範學校入學試驗を受けし五名の內、尋常師範學校三年生、丸山ミツ、馬場滿、荊木テル、小千谷尋常小學校訓導、吉澤幸の四氏は及第せる趣なるが、全國中最も多數の及第者を出したるは、東京、新潟、秋田等にして、數縣を通して一名も及第者なきもありと云。然るに今回女子三學年受驗者三人、悉く及第し全國最多數の及第者を見るに至りしは、好結果と云ふべし。

●東京女學校 （神田區西小川町一丁目一番地）はこたび更に擴張をはかり、いよ〳〵その主旨を貫徹せんとすといふ。この學校はもはら實用をむねとして、中流社會の妻たり母たるべきにかなふべく敎育するを目的とすときく。さて校主は女子師範學校を卒業せし竹澤さと子、學校監督及修身科をうけもちて敎授せらるゝは三輪田眞佐子、和學には三輪義方氏、數學專修科には文部省檢定試驗に合格したる某女敎師なりといふ。かくて校則及學科表は。

私立東京女學校規則

第一條 本校は順良貞實なる女子を薫育し猶將來家政整理の實地に必要なる學科を敎授す

第二條 本校內に幼稚園尋常小學校を設く修業年限は幼稚園三ヶ年尋常小學校四ヶ年とす

第三條 本校の學科を分ちて豫科本科裁縫專科及撰科とす豫科三年本科三年

第四條 豫科を分ちて甲乙二部とす

第五條 豫科甲の部に入らんとする者は尋常小學科を卒業したる者若しくは是に相當せる學力を有す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る者とす

第六條　學齡を超過し學科の修業を爲し難かりし者の爲に特に豫科乙の部を設く

第七條　本科に入らんとする者は高等小學科を卒業したる者若しくは是に相當せる學力を有する者とす

第八條　裁縫科を專修すべき者の爲及小學校裁縫教員檢定試驗を望む者の爲に裁縫專科を設く

第九條　居住地の遠隔にして通學に不便なる者は校内に寄宿を許す

第十條　寄宿を望む者は本校々主の許にありて監督を受けしむ

第十一條　學年は四月一日に始り翌年三月三十一日に終る

第十二條　試驗を分ちて學年及卒業とす但課目によりては試驗をせざる者あるべし

第十三條　學年試驗に及第せる者には修業證書を與へ卒業試驗に及第せる者には卒業證書を與ふ

第十四條　卒業試驗の成績は受驗者の保證人に通知す

第十五條　生徒の募集は毎年四月とす但し臨時入學せんとする者は都合により入學を許すことあるべし

第十六條　入學を請ふ者は府下居住の身元慥なる者を保證人とし學業履歴書及保證書携へ願出つべし

第十七條　入學志願者は其履歴書に因り假に相當と認めたる級へ入學を許し後更に相當の級へ入らしむ但し入學試驗を望む者は試驗の上相當の級へ直に入らしむ

第十八條　相當の學力ある者と雖品行不良の者は入學を拒絶す

第十九條　退學及び學科變更等は凡べて保證人の調印を以て申出つべし

第二十條　生徒及保證人轉居の節は直に申出つべし

第廿一條　本校は特に生徒の品行を注意し不都合ある時は之を改めしめ若し聽かざる時は退學を命ずべし

第廿二條　年中休業は左の如し

毎日曜日　大祭日　大祝日

夏期休業は七月廿一日より八月二十日迄

冬期休業は十二月廿五日より一月七日迄

第廿三條　各科授業課目は左の如し

豫科（甲ノ部）

讀書	勅語衍義　高等小學讀本　本邦歴史 本邦地理　日用往復文　和學初歩
習字	楷行書平假字（日用文）
數學	四則より比例迄　珠算
裁縫	
女禮式	（小笠原流）
點茶	（千家表流）
編物	

本科

讀書	小學　日本外史　十八史略　方丈記 水鏡　大鏡　土佐日記　つれ〴〵草 作文　詠歌　文法口授
習字	楷行草書　平假字（日用文）
數學	算術全体　用算開平開立
裁縫	
女禮式	（小笠原流）
點茶	（千家表流）
挿花	（池の坊流）
編物	

修身科は毎週一回名望ある講師の口授とす

豫科乙の部は各適宜の學科を教授する者なれは爰に授業課目を設けず

筭科隨意科として（火、木、土）の午後三時より教授す

第廿四條　修業時間は毎日六時間とす且毎日三時間裁縫を修め毎土曜日午後に點茶挿花女禮式を教授す

第廿五條　束脩及授業料左の如し

一束脩　金五十錢
一幼稚園及尋常小學科　金五十錢
一豫科　金七十五錢
一本科　金壹圓
一裁縫専科　金四十錢
一筭科　金五十錢
一撰科（一科に付）　金三十錢

但二科以上修業する者は全科の授業料を修むべし

一寄宿料　金三圓

第廿六條　授業料毎月五日迄に納むべし

第廿七條　入學保證書左の書式に從ふへし

（保證書式は略す）

數學専修科及算術國語速成科設置

一今般本校内に數學専修科及女子高等師範學校入學者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の便利の爲算術速成科及國語速成科を設けて教授す

一授業時間は左の如し

一數學科　月水金　（午後三時より午後五時迄）

一國語科　火曜日　（午後三時より午後五時迄）
　　　　　土曜日　（午後一時より午後三時迄）

一束脩金五十錢　一月謝一科金五十錢

入學を望む者は本校に因り入學願書差出すべし

明治廿九年三月

●出產減少して人口增殖す　去月廿二日の官報に、紐育「スターツ、ツアイツング」より轉載せる「歐洲諸國の人口減少」と題する一記事あり。曰く

倫敦の某新聞は、社會學上注目すべき一警報を揭げて、歐洲諸國に於ける出產者の數が、既往二十五年間に於て、常に減少したるの事實を示せり、即ち左表の如し

千人に對する出產者の數	千八百七十六年	千八百九十三年	減少
聯合王國	三四・八	三〇・八	四・〇
英蘭及威爾斯	三六・三	三〇・八	五・五
蘇格蘭	三五・〇	三一・〇	四・〇
愛蘭	二六・四	二三・〇	三・四
伊太利	三九・二	三六・六	二・六
瑞典	三〇・八	二七・〇	三・八
澳地利	四〇・〇	三六・二	三・八
匈牙利	四五・八	四二・四	三・三
白耳義	三三・二	二九・五	三・七
瑞西	三二・八	二八・五	四・三
和蘭	三七・一	三三・八	三・三
獨逸	四〇・九	三六・七	四・二

右の統計を以て見れば、獨逸も亦出產數の減少し行く國なるは明かなり、然るに本月十四日の官報に、倫敦支那「エキスプレッス」より轉載せる、「人口增殖の割合」と題する記事あり。曰く

獨逸の人口は、一箇年に附き千分の八の割合を以て增殖せり。最近の調査に據れば、該國の總人口は五千百七十五萬八千三百六十四人にして、千八百九十年の同上より多きこと、二百三十二萬九千八百九十

四人なり。現時に於ても、尙は佛蘭西的生活を爲せるアルサス、ロートリンゲンに於て、前記の時期間に增殖したる人口の割合は、一箇年に附き僅に千分の二餘に過ぎずと云ふ。

前統計にして精確なるものなりせば、人口は減少するもの丶如く、後統計にして誤なきものならんには、人口は增加するもの丶如し。こは死亡數の減少せるにて衞生の効力顯はれたる表徵なるべし。

●飮酒家と禁酒家の命數　ネイソンと云へる人の調査せるものなりとて、『禁酒界』に左の統計を揭げわりたり。如何なる材料によりて成れるものなるかは知らず、揭げて參考に供す。

齡	飮酒家は	禁酒家は
二十歲の時なれば	三十五歲、六	六十四歲、二
三十歲の時なれば	四十三歲、八	六十六歲、五
四十歲の時なれば	五十一歲、六	六十八歲、八
五十歲の時なれば	六十歲、八	七十一歲、三
六十歲の時なれば	六十八歲、九	七十四歲、三
	まで生活す	まで生活す

●對馬の蒙古塚　對馬は古來屢々外寇ありしところにて殊に元寇の如きは其顯著なるものなり。其當時元兵對馬に戰ひて將卒の戰歿したるものは、戰場附近の地に埋瘞し、石を以て塚を築き去りたる遺趾十ヶ所あり。淺芽灣の海邊には最も此塚多くして、島民は傳へて之を蒙古塚と云へり。此塚には土器或は矛、劍等の埋まり居るものありとは、古老の口碑に傳ふることにて、現に去る二十五年中、下縣郡佐志賀村のをろ島にある蒙古塚よりは、七本の矛を掘出して、宮内省へ献納し、博物館に備付らる丶に至りしこともありしと。

●赤き心(臨井ふく子寄)　山高く、水清く風光のうるはしき事、千早振神の世に、つゆ變らぬ國柄ながら、人の心はいつかうつろひて、君子國の寶、やうやくうせんとす。あはれ澆季の世、世道人心の衰へゆきて、人情の紙より薄きは、云ふも更なり。父子、夫婦の尤も親しかるべきものさへ、利に迷ひ、欲にいざなはれ

て、相和せぬ事の多かる世のさまなれど、師弟の間などは、巧言令色をのみ事として、心より誠に師を敬し誠にしたふ弟子などは少く、風敎日に微なるを覺ねしに、このごろ府立高等女學校敎員玉井貞也女史病み給ふときゝて訪ひける折、四方八方の話のついでに、机の上なる手紙を披きつゝこれを、としめさるゝを見れどろのかざらぬ言の葉に、赤き心の底も見ねて、げに師弟の眞情はかくやとなづかしさのあまり、ろの文、此處によするになん。

先きつ頃より敎への庭に臨ませ給はず一日二日とまち奉れども〳〵見ねさせ給はねどひとり心やすからず思ひ侍りしに今日はのかに承り侍れどいたましやいたつきの御床に日數を經つゝうちなやませらるゝとかさても今ごろはいかにねはしますらむ少しは御心地のすぐれさせ給ひてかれくすりも志るしありてか奥深き御ふすまの中にのみたれこめておはします御心の中如何に煩はしくれはすらむわはれ一日も早くれこたらせられ元の學びの庭に立ち出で給ひて待ち奉るれのれ等をみちびき給ひてよなつかしき御影にあつき敎への露賜はるは何時にかなと思ひめぐらすも涙にていかて御許に候ひて御けしきだに伺ひ奉らまほしと思ふ心は袖にも包みあまり侍れどいかにせん試驗の最中にてかりそめの暇も得侍らず心もとなさのあまり拙き筆をもうち忘れたんとぶらひの心のかたはしむかり聞ね奉るになむあなかしこ

四年生　三谷きみ

玉井先生御もとに

●をゝしき文　昨二十八年、日清戰爭の折、佐藤大佐牛莊にて戰傷を負ひたりしをいたみて、長野縣上伊那郡赤穗小學校、高等科第二學年生、平澤ふさ子の同大佐へたくりし見舞狀なりとて、ろが里なる小林茂夫と云人より、わざ〳〵れこされたり。をゝしされとめ子の筆とも見ねず。わが國の女子はかゝる心がまへころわらまほしけれ。

かしこけれど文して申上まゐらせ候此度の日清戰爭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に付御出軍あらせられ候處牛莊の戰に御奮戰のあまり御怪我遊ばされ候由此頃は如何いらせられ候や一時は御死去との御うはさゝへこれあり誠にかなしく存じ候處幸に御別條これなく御目出度存じ候へ共未だ御全快にはこれなく候由御氣の毒に存上候最も御國のおん爲めに花々しく御はたらき遊ばされ矢玉にあたらせ給ひしは軍人の御名譽此上なき御事と存じ上候たゞ此後萬一の事これあり候折御出軍いかゞと夫のみかなしく存じ上候先は御見舞申上度

あら〳〵かしく

●河内の孝子　平澤ふさ

簷傾きて雨漏る處、却りて孝子の現はるゝもの記して世の暖衣飽食の子に示さん。爰に大坂府下交野郡、川越村、大字茄子作の農、土井留吉の長男忠太郎十三年なるが家は洗ひ上げたる赤貧にて自活の道も立ち難ければ、父は他家に雇はれ母は忠太郎及びその弟妹を養ひ、その日の糊口を僅に凌ぐほどなりしが、忠太郎は孝心深く、殊に學業に志篤けれど、學齢中は就學したしとて、ならぬ中より強ひて、父に請ひて上校せるが、性質温良品行方正にして、學業はいつの試驗にも優等の地位を占めをれり。放課の後は道寄などせしことなく、直ちに走り歸りて、母が紡織の手助けをなし、弟を負ひて米搗をなすに、母はこれを愍みて、背なる子を卸してせよといへど、重みありて却て唐臼の杵が輕う上るとて、寒中にも汗水流して働きつゝ、間だにあれど教科書に目を曝して倦むことを知らず、夜中には繩を綯ひて、これを賣り自分が受業用品に換へ、又年始などに貰ひし祝儀を貯へおきて、授業料に充つる等、すべて全校生徒の摸範となるべきより、一郷の人皆孝行忠と綽號するに至れりとぞ、實に末たのもしき寧馨兒ならずや。

●東京府下第一の高齢者　世に長壽ほど目出度ものは非ざれども、其長壽にも限りありて、浦島、武内などの事は(中略)昔話に過ぎず。人生古來百歳を超ゆ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るものは甚だ稀れにして、歴史に三浦の大助が百六歳にて、皺腹を掻切りたりと云ふは、恐らく武士の長壽頭にして、天海僧正が百三十餘歳にて入寂したるは、僧侶長命の隨一なる可し、又常人にて百歳以上の壽を保つものは間々見聞せざるにも非ざれど、玆に東京府下第一の高齢者はど健康なる老人は世に類ひ稀れなる可しといふ。(中略)南足立郡、江北村、元沼田三百六十三番地、農清水喜太郎の曾祖母、清水とうと云へる婦人なるが、此婦人は光格天皇即位九年、即ち天明八年三月十日の出生なれど、本年は恰も百九歳にして、其出生の年は徳川十代の將軍家齊公が、將軍宣下の翌年ゆゑ、婦人が壯年の頃は、大江戸の繁昌を極めたる所謂大御所時代にして、婦人は花の盛りを徳川最盛の世に過したるものといふ可く、大阪に大鹽平八郎が亂を起したる頃は、其歳恰も五十歳、又黒船が浦賀へ到來の騷動は、此婦人六十五歳の時に起りし始末にして、維新の時には最早や滿八十歳の高齢なれど、一生の中には徳川氏十五代の治世中、其六代を經過したるものにして、此間に又天皇の御世を替へらるゝこと四代に及びたるは實に目出度老人ゆゑ、社員は態々其生活の摸樣を聽かんと、婦人の家を訪問れたるに、其家は千住の大橋を距る、一里十二町の西北に當りて、荒川堤に添ひ往けど、彼岸參りが記臆する、六阿彌陀の第二たる眞言宗惠妙寺より、半町許り艮の方に當り、巽に向へる畑中の二軒家にて、地形は至極健康に適當せる樣思はれたり。

扨案内を得て、老婆に逢ふに(中略)、剃髪して、名さへ海空と改めたるが、一見したるところ更らに老衰の摸樣もなく、自ら茶など汲みて歡待しながら、話すを聞けど婦人が生誕したる家は、此清水家に非ずして、同村内の大字鹿濱新田の農、橋本惣右衛門と云へる家の長女なりしが、今を去る九十年前、婦人が二十才の

時、此清水家の先々代、清水治右衛門に嫁ぎ來りたれど、治右衛門は寛政元年の生れなれど、婦人よりは一つ年下にて、去る明治十六年まで夫婦共別條なく經過したるところ、夫治右衛門は同年九十六才にて死亡したれど、此時九十七才にして婦人は初めて後家と爲れり。又婦人が里方の兩親も、甚だ長命にして、父は九十才、母は八十六才にて死亡したる由、婦人と治右衛門との間には、三男二女ありて、孰れも今日生存し長男は八十一才、末子は六十一才なれど、此間にも又孫、曾孫、玄孫等多くありて、婦人の骨肉たるもの數十人の上にあり、既に婦人か毎日相手として膝下に集め、樂むものは玄孫達にして、清水家の當主喜太郎は婦人の爲めに曾孫に當れり。然るに婦人今日の生活は、甚だ健全にして、耳は少しく遠けれども視力は更らに衰へずして、一町位先きの人は男女の識別を爲し得るのみか、眼鏡なしに針を通して、縫物を爲すことあり、又腰も更らに曲らざれど、杖の必要を感ぜず。唯意の儘に近郷を歩みて、或時は三里先きなる金町村に、末子の吉岡勘次郎(六十一才)を音信れんと、車にも乘らず、玄孫を連れて往く事あり、又婦人平生の食事は、此邊りの習慣にて挽割麥に、通常の野菜を添へ喰ふこと少壯の時と異ることなく、若き時より著しき養生といふ事は爲さざれども、性來酒と煙草は毫も之を嗜ずといふ。婦人は斯の如く健全無病にして、矍鑠たれど、近所近邊聞傳へて寺院の建築、鐘の撞き初め、又は架橋の渡り初め等には、常に招かるゝこと多く、殊に夫治右衛門の生存し居る頃は、生きたる尉と姥なりと評判され、十數年前上野にて市民の爲め陛下御臨幸の時は、夫婦とも上野へ召されて、養老金を下賜され、其後憲法發布式と、大婚式の兩度にも下賜金を受けたりと、又婦人の家は江北村、元沼田の人戸八十許りの中にて、中等位の生活なれど、府會議員の撰擧權位は有する由、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

去る明治十六年夫治右衛門に先立たれし後は、佛門に歸依して惠妙寺の阿彌陀に後世を托し、名も海空と改めたりしが、一昨年即ち明治二十七年は、恰も此婦人百七才に當るとて、同年三月十日、子、孫、曾孫、玄孫等相集り、鎮守に參詣して長壽の祝を爲したる由にて、其時婦人は白無垢の下着に、梅と牡丹友禪染の上衣を着け、縞繻子の帶を立矢の字に結び、緋鹿の子の帶上げを用ひて、紫縮緬緋裏の頭巾を冠ぶり行けりと云ふ。世にも稀なる目出度老婦人と云ふ可し。

（時事新報）

●日本の豆腐　倫敦タイムスに面白き記事あり、云く日本人の食物に供する豆腐は、大豆の蛋白質より製したる物にして、消化し易き事牛肉の如く、毎日新らしく製する事を得、色純白にして牛乳の沈澱したる時の如き味を有し、板形に切りて朝夕賣りあるくものなり。之を製するに當りて、少しもバクテリア抔の生ずる患なく、或人が之を野菜乾酪と稱せしは、其當を得ず、又凍豆腐と稱するは、通常の豆腐を寒風に晒して、収縮せしめ、稍々固くしたる物なるが、兩つとも良好の食物として、味ふに足る。米を日常の重もなる食物とする日本人なれど、窒素質に富みたる物を食物とすべき筈なるに、斯く化學及び生理に叶ひたる食物を如何にして發明せしかは、驚くに足る。日本の海邊に住する人民は、重に魚類を食し、山間の人民は豆腐を副食物となす。豆腐が實際牛肉の如く健康を補ふに足るや否やは計り難きも、兎に角良好の食物なれど、我國にも之が供用の途を開かば、實に低廉にして有用の食物を得べしと。

●電氣學上の發明　電氣學者、獨逸國レントゲン氏は、多年研究の結果、今回電氣に就いて、不思議なる現象を發明せりといふ、其要旨は動物金屬等を電氣の作用に依りて透明となし、其組織骨格等を明瞭に透見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し得べしと云ふ。今其試驗を聞くに、即はちガイスレル氏管内の瓦斯の量を減じて、殆ど百萬分の一に至るまで稀薄に成し。之れに電氣を通ずるときは、消極線は青色の光層を生ぜずと雖も、之れに對する玻璃壁は、綠色の光を發す。是れ消極より不視の線を發して、玻璃壁にフルオレッセンツを起すに用るなり。然るにレ氏は此管を黑色の紙にて包み、其外方にフルオレッセンツを起すべき物体を置きしに、果して又フルオレッセンツを起せり。之れに由て氏は初めて此不視の線は黑色の透明にあることを見出せり。次に又此管を木製の箱に入れ、四方を密閉し、同じく電氣を通じて之を試みしに、此線は又能く木質を通過せり。其他動物体の組織及び金屬中錫の如きも亦全く然るを見たり。尙氏は此理に由り人の手及魚類等に試みて、其骨骼を明瞭に寫眞に取り得たりと云。若し之を醫學等に應用したらんには、其便益一層多からん。

●結婚者女　東京選出の前代議士檜山鐵三郎氏近頃臺灣に在り。生蕃酋長の第二女と結婚したるよし、其結納と云ふは水牛二頭其他酒などにて、彼我折衷の式を擧げ、其後伉儷の情いと濃かなり。斯くて新婦の一族は日本人の聟を取りたりと誇り。檜山氏も亦生蕃征服の先鋒たりとて得々たりといふ。

●丁汝昌の未亡人　上海よりの報に故水師提督丁汝昌、妻魏氏は、夫の死後國内の誹を憂ひ遺骸葬式前七日絶食して死したれど、遂に夫婦合葬したりと云ふ。

●あやしきこと　さる新聞にしるしつらく、

獨逸皇帝の不人望なる事は偶々英國在留獨逸人の同皇帝の誕辰日に於ける擧動に依りて明かにされたり(中略)同皇帝の不人望なる所以は近來同皇帝の言動が云々

皇帝の不人望などいふことを外國にはありと見れたり、日本人の耳にはあやしくきこゆるなり。

●不敬奴　近頃專ら世間の風評に上りたる、第二高等學校の不敬事件の由來を聞くに、同校には校長派と敎頭派との二派ありて、職員は勿論生徒に至る迄、兩派に分れ、常に軋轢紛爭絶えざりしが、去月十一日の紀元節に際し、校長派の傭敎師米人カロザーなるもの、畏くも　御眞影に對して拜禮することを肯せざりしを以て、敎頭派の職員及生徒は非常に激昂し、一同申合せて出校せず、爲めに臨時休業せし程なり、此外國傭敎師カロザーは校長吉村寅太郎氏とは嘗て師弟の關係あるを以て、校長は平生頗る同氏を優待するより、敎頭派の人々は一層之を不快に感じ居たる矢先に、右の不敬事件起りしを以て、其折合甚だ惡しく、爲めに校長も殆んど困じ果て、遂にカロザーを免職する事に決心し、目下其筋へ照會中なるが、敎頭派の首領とも仰がるゝ千頭淸臣氏は校長の處置次第にては、斷然其職を辭する覺悟なりと云ふ。騷々しきことゝなるかな。さるにても我國に衣食しながら、さるたふれたるわざするあさましき奴は。とく〳〵已が國にかへるべし。

●ニウメキシコの催眠草　ニウメキシコのさる地方に不思議なる草あり、動物之を食へば必ず睡氣を催す、偶此處を通行する旅人など、樹蔭に憩ひ、馬をして草を食はしむるに、暫時の後馬は頻に睡氣を催し、遂に睡りて動かず、旅人の困難を感ずること少なからず、やがて一二時間の後、馬目覺めて歩み出すを見るに、敢て之が爲に格別害ありとも覺えざるが如し。然るに此邊に在る牛羊の群は、屢來りて其草を食ひ、忽ち横はりて眠る、覺めては食ひ、食ひては眠ること十數回、遂に渇を感ずるに至つて止む。抑此草に如何なる物質を含みて此の如き働をなすや最も不思議の草にこそ。

●前號正誤　女鑑第百五號雜報美擧といふ記事の内(六十五丁下段十四行)一丁目は四丁目。長光は光長を誤れり。送金さるゝ方は注意したまふべし。

教の庭

三月廿日　兼題　硯　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

底あさきすゞりのうみと人はいへど
そのいさをしのふかくもある哉
肥後國熊本市東寺原町　田代艶子

地

龍をどりくものなみさへわきいでん
すゞりのうみぞくすしかりける
肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

人

朝ゆふにむかふすゞりのうみよりぞ
ことはのたまはにほひいつらん
松山市魚町三丁目三十八番戸　久松伊子

人

われもいざすゞりの海をあさり見む
そこにはたまもありとこそきけ
三田四國町二十二番地　師岡千代子

目にみねこゝろをうつす言のはは
すゝりの外にあらしとそおもふ
佐山静子

水くきにおもひをなかすてすさひも
すゝりのうみのあれはなりけり
永井さい子

筆とりてすゝりのうみをさかしなは
たまなすふみもかきやいたさん
静間密子

すゝりの海あさな夕なにあされとも
あさきこゝろぞかひなかりける
丸山すま子

硯のうみなみ〳〵ならすあさりなは
世にひかりあるたまもえつへし
鈴木美恋子

筆のうみなみのしたなるもくつのみ
かきあつめてもかひなかりけり
進藤もと子

難波津を手ならひそめしむかしより
かはらぬともはすゝりなりけり
南大路正子

たゆみなくすゝりの海にあされとも
そこのたま藻はえられさりけり
南大路芳枝子

かく文字の筆のすさびにさきにほふ
すゝりのうみの花をしそおもふ
佐山幾子

かきならすその水くきのあさみれは
すゝりのうみはかきりしられす
小野田くに子

する墨のその眞こゝろもあらはるゝ
すゝりのうみの程をしそおもふ
貫井そめ子

水くきのあさなかくまてあされとも
盡きぬすゝりの淵をしそおもふ
宇田川よし子

言の葉の千くさのはなもそこひなき
すゝりのうみににほひみつらん
小野田かま子

大方のひとのいのちにかきりあれと
小野田さく子

千代のかたみはすゝりなりけり　小野田　ひで子

そこひなきすゝりの海のふかきなも
見ゆるはふてのほかなかりけり　岩崎　ふく子

言のはのたまのひかりはするすみの
硯のうみの　いさなさそ　おもふ　小玉　きん子

言の葉のふてのはやしにさくはなは
すゝりのうみやもとぬなるらん　宇田川　うめ子

水くきのふてのしつくのかきりなく
つきせぬうみはすゝりなりけり　石井　さめ子

ちはやふる神のみよなるふることも
なかれいつるはすゝりなりけり　貫井　たま子

須磨の月よし野のはなのけしきなも
硯のそこにあらんとそお　もふ　太田　やま子

いろのかみふるきむかしの古ことも
すゝりのうみのしづくなりけり　小野田　きよ子

給なゑがき文なうつしてのちの代に
のこすすゝりの水なしそおもふ　安井　章子

月はななめづるすゝりのかくはかり
ともなふ友はあらしとそおもふ　奥原　ふく子

もし怔草生ふるすゝりもあれたちて
かきあつむへきことのはもなし　石取　正代子

ちはやふる神代のこともしりぬへし
すゝりのうみのふかきめくみに　山田　香川子

おもふことすゝりの水にせきいれて
うかふことのはかきりあらしな

とにかくに思ひなのふることのはは
すゞりのうみのそこにこそあれ　仁保　甚子

むすひてしなはにかへたる水くきも
そのみなもとはすゝりなりけり　河野　文子

たらちれの母のたまひしなすゝりの
海のめくみのふかくもあるかな　赤羽　若枝子

いにしへのなかれな酌みて今もなほ
すゝりのうみのたゆるひもなし　赤羽　菊見子

おもふこと筆のまにまにかきなせる
すゝりの海のふかくもあるかな　星野　一子

いさおほく友となすへきものあれと
すゝりのほかにによるものそなき　甲斐莊　優子

波たゝぬすゝりのうみのゝとけさに
つくゑかしまもはるめきにけり　小野田　のふ子

打ちむかふすゝりの海にさなさして
まなひのみちにふかくあそはん　津田　德子

すゝりこそ深きことはのうみならめ
あさりしまゝにかきすさひつ　小野寺　竹子

うすくこくするにまかするすゝり石
こゝろにはづるみづぐきのあと　石川　るい子

ゑたしさのすゝりなからも面なくて
つたなきふてのはづかしきかな　石川　きん子

水くきのあときよかれとならふかな
すゝりのうみのあせはつるまて　岡田　もみち子

すりなかすすゝりの海はあさけれと　小幡　富み代子

ふみかくみつのたゆるまそなき

そこきよきすゝりの海におりたちて
ごさはのたまないさひろひ見ん　山田惠い子

末の世にこさはのはなのこれるは
すゝりのうみのふかきいさなか　小幡千代子

すり流すすみにも千代のいろみねて
すゝりの海のふかくもあるかな　平澤ふさ子

わすれじさまなひしこさなかく皮に
すゞりのうみになみそたちける　栗田口信子

君か代のめくみのしつくかくはかり
すゝりのうみにつきぬなりけり　前澤芈子

静かなるすゝりのうみにすむなろち
いかなるたみやふきおこすらん　松井喜代子

なか〳〵にかきもつくせぬ藻しほ草
すゝりのうみのたまひろふまて　小町谷りね子

もろこしの青たんいしはさまれかく
あかまのすゝりあめはたもかな　小町谷園子

みつくきのあさな千年のかたみさて
すみすりなかすわかすゝりかな　淺賀俊子

藻しほくさ繁る御代こそめてたけれ
すゝりのろみのふかきめくみに　筧喜代子

すゝりいしすみすりなかし筆さらは
世にちりうせぬはなもさくらん　横堀國子

おこたりのちりに埋れて如つくゑの
すゝりのうみはあせはてにけり　平山房子

あさけれさむかふりすゝの海にこそ
ふかきこゝろもかき得らるなれ　土肥仙子

黄金つむ千世のたからもうかひ出て
すゝりのうみのそこひなきかな　羽田三緒子

かくはかりあさりても猶すゝりの海
もくつより佐かひろひかれつる　田津木久子

すゝりの海底のまたまなあさりても
ひろひねぬみのはつかしきかな　眞鍋直子

古しへのかしこきふみのあごもな佐
すゝりのみつなたのまぬはなし　清水あい子

いにしへにすゝりの石のなかりせは
かしこきみちのあさやたねせむ　藤林ます子

もし佐草かきつゝたまもひろはなん
すゝりのうみのつきぬかきりは　植木鋼子

打ちむかふすゝりの海のつきぬ世は
なほかきたてん千ゝのことくさ　細溪椽子

さし〳〵にかきそふ文のやま見ても
すゝりのうみのふかさなそ知る　牧貞子

あさゆふにすゝりの海にあそふみは
そこのまたまなうるよしもかな　牧野千止子

あさゆふにむかふすゝりの海なれさ
そこのまたまはうるよしもなし　牧野峰子

する墨のにこりにしまていさきよき
こゝろあかまのすゝりいしかな　杠秀子

つれ〳〵をなくさめんさてうち向ふ　下元もさ子

みやひのともはすゝりなりけり

紙やかはふてのはやしはかはれとも
すゝりのうみはあする世そなき　重松たか子

明け暮れにつくゑの島によりそふも
すゝりのうみのあれはなりけり　矢野高子

もくつなすちりをはらひて朝ゆふに
すゝりのうみをわけあさるかな　野中あさ子

朝なゆふなすゝりの海はあされとも
ひろひかたしやそこのしらたま　岡淑子

あまりてもあまりても猶得かたきは
すゝりのうみのそこのしらたま　三笠嘉子

うひ學ひしてよりおいのけふまても
かはらぬことらそすゝりなりける　高瀬烈子

よにそゝくすゝりの海のめくみには
ちさきのうみもなとおよふへき　高瀬華子

よきみちはすゝりの海にわきいてゝ
あめかしたをはうるほしにけり　高瀬敏子

いつまでもすゞりの海にあそびなん
ふみのはやしをわがいへにして　高瀬夏子

すさましき覆ぬのたつもみやひなか
すゝりのうみにおひたちにけん　河野多加子

かきりなきふみのはやしに遊ひてそ
すゝりのうみのふかさしらるゝ　河野やゑ子

朝ゆふにむかふすゝりのうみにこそ
こゝろのちりはあらはれにけれ　河野さまゐ子

なにはつを習ひそめにしむかしより
したしきともはすゝりなりけり　楢瀬兎女子

たらちねの堅きこゝろはすゝり石の
みたまとなりて身をそまもれる　島田悦子

すゝりのみ巳かこゝろにかなふかな
するにまかせてこくもうすくも　大竹治子

あさ夕にむかふすゝりのかひなくて
するすみにさへはつかしきかな　仁井田富子

もしほ草かきなすことのしけけれと
すゝりのうみはかわかさりけり　武田粲子

さゝやけきすゝりの水もなかれては
ちよのふることよにつたへけり　内田桂子

いと深きすゝりのうみのめくみにて
はゝかおこせしみつくきのあと　内田雪子

世の人のことはのはなもさまざまに
すゝりのうみにうかへてそみる　徳永萬壽子

たくひなきみやひの友はあさな夕な
むかふすゝりのほかなかりけり　林久子

なみ風もたゝぬすゝりのうみこそは
ゑつけき御代のすかたなりけれ　廣田さめ子

立ちのほろ松のけむりもすゑつひに
すゝりのうみのなみとこそなれ　有坂せい子

いにしへの文もそのまゝみゆるこそ
すゝりのうみのあれはなりけり　後藤のぶ子

かたみなる母のすゝりを見ることに　北島まつ子

いよ／＼こひしさし代經ぬれと

さし涙のよせてはかなきわかみには
すゝりのうみのかわくまもなし　北島こと子

春たちししろしなるらんするすみの
すゝりのみつもこほらさりけり　西尾直子

よに高きふみのかをりのかす／＼も
すゝりのうみのふかけれはこそ　牛谷いく子

すり流すすゝりのうみのそこにこそ
世にも得かたきたまはひそめれ　牧村ちよ子

世のなかのすゝむにつれてそこ深き
すゝりのうみもひろくなるらん　青木春子

するすみも筆もかはれといつまても
かはらぬものはすゝりなりけり　小森さた子

そこひなきすゝりの海のとこしへに
いともたふときうつはなりけり　北村孝子

日に月にふみかくわさのひらくるは
かたきすゝりのあれはなるらん　北村てい子

をしへ草うゑてみちびくふてよりも
もとのすゝりそたふとかりける　卜藏義江子

目の前にむかしをいまにみることも
やまとすゝりのちからなりけり　卜藏登喜世子

しきしまの文のをしへをわすれじと
すゝりのいけのかわくまもなし　宇野知惠子

うちむかふすゝりの海もうちとけて
ふかくもはるのこゝろみねけり　堀岸かと子

うちむかふすゝりの海のひろけれは
うかふこと葉もかきりなきかな　佐藤雪子

あさり行くふかきすゝりの海よりぞ
千代につたへんふみも出つらん　山形信子

古へのことはのはなのにほへるは
すゝりのうみのちからなりけり　土岐米子

大かたはなきやさはなしすゝりいし
けにひとの世のたからなりけり　上條よし子

水くきのふてとることにおもふかな
すゝりのうみのふかきめくみを　百瀨八代子

うち向ふすゝりのうみのもしほくさ
かきねぬふてのはつかしきかな　百瀨かつ子

もしほ草書きつくせともあさからぬ
すゝりのうみのそこひしられぬ　佐々木ちつね子

友つとひすゝりさり／＼すみすりて
世ににほはせんことのはのはな　松尾こと子

すゝりいしの海ふかけれはもしほ草
かきもつくせぬみつくきのあと　増田すゑ子

打ち向ふすゝりのうみにむら／＼と
見ゆるはまつのけふりなりけり　勝もゝ代子

書くふみのつたなきなのみなけく哉
すゝりのうみのあさきこゝろに　原いち子

うすく濃くこゝろのまゝにする墨に
すゝりのうみのめくみをそ思ふ　山本すて子

あさ夕にむかふすゝりのうみにこそ　萩原しげる子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

名に高き八しまのうみのそれよりも
　ふかきめぐみのほどもしらるれ　高井孟子

世のさまをうつしうつして跡絶ぬ
　すゞりのうみのめぐみふかしな　吾妻ちか子

打ちむかふすゞりの岡にふでさめて
　すゞりのうみぞうれしかりける　諸井くら子

あまのかる玉もにましるふでくさも
　四方のけしきをまつおもふかな　池谷さみ子

九重のくもゐのみかはいちひさも
　すゞりのうみに生ひぬへきかな　山本いく子

すりなかす松のけふりもにほひつゝ
　かたへはなきぬすゞりいしなか　舘脇ます子

かきなかすすゞりの海のみちひこそ
　うれしきものはすゞりなりけり
　こゝろのなみによるさこそしれ　小曽根しう子

三月廿日　兼題　養蠶を勸む

天　播磨龍野　眞鍋直子

先つ日對面給はりしをり聞えまつりしかのこがひのわざの國を富ますすぢに大いなる事はよくしらせ給ふ御ことなれど今さら申すべくもなくなんましして御許には桑の木あまた植ゑさせ給ひて此頃はいとよう茂りあひ侍る事にもあれど今年はかならず思し召したゝせ給ひて試みかてらまづ少しばかり養はせ給ひてよかしかたみに運動のたらはぬかちなる身にはいとよきやしなひともなり侍りぬれど御身などもいかにすこやかにならせ給ふらんと思へ給へられてかくすゝめまゐらするになん御返事待ち奉りてたねはこなたよりならひて參らすべくなんかしこ

地　播磨龍野　田津木久子

こがひは女のつとむべきわざの一つとていともかしこき御あたりにても御みづからかはせ給ひてろの道をはげまし給へるに近き頃はこと國との貿易のわざのますますく進みてわが國輸出品のいと多かる中にも其半は蠶糸とかにてまことに重要のものと承り二とせ三年世話なし侍りしにはじめはいかゞと思ひしもなれゆけどいとゞくたのしきものにて ことに妾の ことさかよわき身にはいとよき運動ともなり侍りて知らせ給ふごとく此頃はいとすこやかになり侍りしもこがひの德とや申すべからんかしされど御身にもすゝめまゐらせんとおもひ給へらるゝ折柄ろのみこゝろれはしますよしうけ給はり國のためはた御身の爲いとゞくうれしくてなんいとよき種の侍れど分ちまゐらせんにかならずかならず思ひたゝせ給ひてよ御かへり事待ち奉るになん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人

福岡縣鞍手郡山口村大字沼口百九十四番地　河野多加子

此頃あづまより蠶かふ道を敎ふる人をまねかれこの業をあまねく學ばせんとて有志の人たちの企てあれど妾も敎を受け蠶飼ひの業を初めん心はへになん言はずもしるき事ながら生糸は皇國の產物としてはかしらをしむる程にてしかも女子の手わざには至極ふさはしきことにしあれは其許にもこと初めたまひてはいかゞにやあづまの國々はつとにこのわざさかりなれども我西の國へはいまださかりとはいひかたかりけに思へは口惜しや博多の織物は國に名ある產物なるに其の原の料たる生糸をみな東の國に仰ぐはいかで殘念の事にあらずや是よりもろ共にはげみつとめて國の富をはかり又一つには家の榮ゑを思ひ玉ひて速かに事始めたまひてよ

奥原ふく子

世の進みゆくに從ひて生活の程度ます〱高くなりゆくは免れぬ理りにて日清戰爭以來我が國運の開けゆくにつれ外つ國との交際もいよ〱しげくなりぬれば一方にて陸海軍を擴張し敎育を普及せしめて國權の伸長を圖るとともに一方にありては殖產興業の道を勵して國力の充實を計らざるへからず實に今日は婦女子とて徒らに手をつかねて男のなすがまにまにうちすておくへき時にあらず男は外を治め女は內を治むといふ如く富國の道に於ては十分に務むる所なかるへからず而してそが職業多かるが中に最も婦女子に適するものは現今我貿易品中第一位を占むる生絲の原料たる養蠶の事業を措きて何をか求むへきまして我國は氣候溫和空氣清淨にして最も養蠶にかなひ古よりいとやんごとなき御身をもて自ら桑とり蠶を養ひて此業を奬勵し玉ふに於てをやあはれこの聖代に生れたる婦女子たちよ奮ひて養蠶の業を興し以て皇恩の萬一に酬い奉りあはせて國力の充實をはからざらめやは

名取正代子

今や國運日にひらけてよろづのことわざしげくなるにしたがひ萬の國もきそひにきそひて何くれとなくすゝみゆく世とはなりぬされはおのれら女とてもふさはしきわざわきまへて世におくれざらんこそのぞましけれ文武の道はいふも更なれど農工商のわざもまたおこたるまじうなんされば女にかなひたるわざはすなはち養蠶にぞありけるかしこきあたりにてもとおぼし給ひてやとくより此わざをさせたまひぬと承りぬおのれら國民いかでもろともに心を同うし力を協せて此わざつとめはげみていみじうめでたき品を多くつくりいだして盛に外國までも送り出さんにはいかに御國も富みさかゑん一家の富は一國の富なり御國に盡す道豈文武にとゞまらんやかくて年月たゆみなくつとめなば我國はたゞに文學にすぐれ弓矢にたけきのみかは富强も萬の國にたちこゆなむことをげにとおもはん人つとめたまひてよ

佐々有鄰子

千早振神代より今の世かけて蠶のことは大宜津比賣神の頭に生りしをもとにて仁德天皇の御代に奴理能美が所養虫を大后に獻りしより御歷代の皇后たちの御もとはさらなりしづ山がつがふせやにも養蠶せぬはなきまでにいたりしも神ながらのくすしき敎のあればこそ外國かけて生糸のつやうるはしけれ久方の天雲高くたたへらるゝ國の光台灣島に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も及ぼしておなじ養蠶はさかりなりさなんいへるひさへに神々等のみたまのふゆなるべしあな口さがなしささがめたまはで我のわが業のむくさかにいそしみたまへ貴孃たち

花山保江子

外國々の人々らいみじうほめたゝへて多くの黄金を惜ます買ひ求めらるゝは我が國の產物の中に於て生糸にまさる物はあらさるへしされば世の姫たちよ勉めて蠶を飼ひて我が國の富を圖られん事を心にかけられよ世に種々の業は多かれさ女の身にかなひて其利益の多きは此の養蠶にこゆたる業なし世の男子たち軍人さなりて彈の霰や劔の山に踏み込みて君さ國さに報ゆる眞心を盡し艱き艱難を忍ひやられなはたさへやんごさなき姫たちにもせよ君さ國さに報ゆる眞心を以て花に醉ひ月にうかるゝ餘暇を惜み養蠶に心を委ね我が國の富を圖り海山も尚ほ及はさる君が深き惠みに報いたまへかし

細溪梅子

それ養蠶は其むかし應神の帝の頃唐國より來まししし人の始めぬさが古き物の文に見ゆにきそれより世々大に此業をはげまされいさかしこき御あたりにも手つから此事をさり給ひぬさが其の以後絶ゆまなくいさく盛んにいさなみし故今わが國の輸出品中高き位を占め居るになんこれ婦女の手わざに最もなれ易き業にして氣候も我國の暑さ寒さの甚しき差なきを殊によく適するさかやされは女子皆共に進みすゝみてたゆみなく養蠶を事さして日に月に此業の進み行きていやましに盛になりなん事をのぞむになん

牧野貞子

それ養蠶は古より我國女子特有の業さして行はれ上にかしこき御あたりより下は片山里の賤の女に至るまで盛んにいさなみし其のしるしにや今外國輸出品の第一さしてたゝへらるるはいさも嬉しき限りになんさるをつくづくこの頃のさまを見るに都わたりは更なり地方にありても漸くこの業おさろへゆくはいかなる原因にもさづけるかげに口惜しき極みにてかくて遂にかへり見る人もなくなり果てんには國家のためこよなき憂さもならんかしわが日の本の候氣にさしたる差なきを以て殊にこのわざに適すさきゝつるをあはれ數多き姉妹の人々よくよく此のことわりをわきまへひたすら此業に從事してますます國益をはかり婦女さして君のため國のため務めはげみて力をつくすべき事にこそ

西尾直子

產物は國をさますもさゐなりされば いづれの產物にまれまさりおさりはなけれども生糸ばそのうちもさもおもきをしむるものなれば養蠶をいそしみて多くの糸をつくるはまことに大切なることぞかしかしこくも神代のむかし保食の大神の養蠶をさづけ給ひしもそのむね深くかつはかしこきあたりにて御てづから心をつくしてみちびき給ひしためしいさおほく誠にありがたきみこゝろにこそ さればみこゝろにしたがひ奉りて養蠶をいそしむべきこそ我國民のなすべきつさめさ云ふへけれ

牧村ちよ子

日にましのさやかになりて前栽の木の芽もふくらみ追々養蠶の時期もせまりたるに付て申上度は蠶の景況に御座候まつ當地の如きは養蠶學校の設立ありしより近く兩三年は地方の飼育術一際開け進みいたづらに舊染の經驗のみを賴ます學理を實地に試むる樣に相成候は誠に學校の功績かさ感し申候當校も追年規模を張り當時は生徒も大にまし隨分遠き國々より參り研究いたし居られ候へは遠からす全國へ普及致すべくさ存じ候御地の如きは氣候も適度の由に承り候へは御試みに御飼養なされては如何に候か必す利益のあるへき事業さ考へられ候思召次第

私宅にて製造いたし候蠶種御送り申すへく候御不安心に御座候はゞ飼育に熟練なるもの御世話致すへく候 斯く申上け候も行商的の廣告と思召さす御熟考下され候上御返事いたゝき度猶くはしくはそのおり申上へく候かしこ

北村てい子

我國の産物そのかす多けれとわけて最も名のいちしるしきは生糸なりけり此の生糸も蠶といふ小さき虫のあれはならん進む世にならひて近年は養蠶大に流行して至るところに養蠶會社製糸會社なとまうけありて何れも誠にさかんなることになんまして當時はおそれ多くもやんことなき姫君すらみつから親しく行ひ給ふとかほのかにうけたまはりぬされはわらはとものしらて叶はさるわさといさゝかなれと三とせはかり前より養ひしに其の功用のおひたゝしきを覺ねぬ虫の心地よけに桑をくふ音又は見るまにおひたつにはほと〳〵感し侍りぬ今は飼ひなれていとも面白く思ひぬれは桑苗うゐつけてこたひは去年にまして養ひたしと思ひぬ日頃したしき友たち日の長き折から文のよみかきにうみ給ふふしのつれ〳〵に養ひ給ひなは御國のたからをまし又我身のためにもよろしからんと思ひのまゝかくもすゝめまゐらするになん

小森さた子

養蠶のわさはわか國古よりひらけことに九重の雲の上かしこきあたりにもこれを御手つからなさせ玉ひ民にすゝめ玉ひしより我も我もと此わさをはけみしかは我國の絹糸の名は外國まても響きリヨンの絹にまさるともおとらしとまてほめたゝへ日に月に盛りになりゆき今はいつれにも桑畑を見ぬ所なきにいたれりしかはあれとこのわさはむかしより女の手藝としてつたへ來れりそは又よしあることにて蠶の卵のかへりて仔虫となりしより桑の他には心をよせすあたへられたる窠よりほかへは出てす四度の眠りをなして遂に繭を作り化して蛾となり卵を産す其姿の温雅なる其性の貞順なる其心の清らかなる實に女の心得へきふしのみにしてむくつけき男の手にはそたてかたきものなりされは世の女子は此わさをこそつとむへきに多くは田家の子女のわさとなり都會の女子のこれを知れるもの少なきこそうたてけれ世の女子たるものはよろしく上の大御心を思ひ一つは國の富をますへき萬一となし一つには此虫の行ひをかんかみてわか心をかへりみますますつとめはけみて扶桑の名のいつはりならぬやうなさまほしや

北村孝子

おしなへて女の心かくへき業は千草のかすにも劣らすあはれそか中にも最も高尚にいとも優美なるものは養蠶なりわらはすきつる年よりいとなみ侍りしに其の始め卵よりかへりたる時はあはつぶのやうなる虫も桑葉をさつくるにしたかひて日ことにおひたち其の姿はやさしくいとも温和にして四度のねむりをへつひに繭を作りて其のうつくしさ何にたとへんやうなくのちはひきて則ち生糸となる其生糸こそ我國の物産の中の重なる輸出物にて外國までもきこえたるほまれあるものなれされは此業を知るはむたごとにてはあらすかしあはれ御心のおはしまさは君ものそみてわれらがまとゐにひかりを添へたまはんことをせちにいのりまゐらするになん

庭竹　　諏訪晴子

吹く風にまかせてなひくにはのたけ
　折れぬみさをはあらはれにけり

岩上龜　　仝

こけのむす岩根をしめてよろつ代も

こゝろゆたかにかめあそふらん

名所若菜
なつみ川きしへのこほりとけそめて
ゑくのわかなそまつみとりなる　河野文子

都早春
さほ姫のくるまのきしるおともせて
しつかにきたるみやこちのはる　靜岡みつ子

餘寒
うくひすの聲もこほりてきこゆなり
はるのひかりのさはかへりつゝ　仝

早春霞
さしのほる朝日のかけもほの〲と
かすむみそらにはるたちにけり　梅津いし子

春雨
淺芽生のみとりにふかくなりにけり
ふるはるさめははなにのみかは　風間千代子

春氷
むすひにし岩間のこほりうちとけて
ひとのこゝろもはるめきにけり　住山幾子

櫻
山さくらえだもたわゝに咲きみちて
うへのははなのさかりなりけり　仝

夜梅
園のとのすきまもりくるうめか香に
はるもれられぬ夜となりにけり　風間千代子

春月
小倉まやかすみの間よりもれいてゝ
おほろににほふはるのよのつき　仝

神戸なる布引の瀧を見て
たれにかもきせんとすらん山ひめの
かけさらしたるぬのひきのたき　楠瀬とめ子

名所梅
今もなほひとまちかほにゝほふなり
はつせのさとのうめのさかりは　仝

水邊春草
みきはにも春のひかりのあまねくて
ゆきまなからにもゆるわかくさ　牧野貞子

名所鶯
うくひすのなくなる聲もかなるなり
うめさかりなるつきかせのさと　仝

山殘雪
柴ひとのわけしまゝにてのこりけり
はる日のやまのこそのしらゆき　仝

松間月
ふく風になひくこすゑにかけもれて
まつの葉こしの月そさやけき　平澤ふさ子

水邊柳
ふくまゝにみつの上はらふかは柳の
いとよりたるゝつゆのしらたま　西尾直子

花なつま　北島こと子

菅の根のながきはる日を今日もまた
　　はなをまちつゝくらしけるかな　北島こと子

かへり來ぬ月日としれど今日もまた
　　はなをまちつゝくらしつるかな　北島まつ子

花

湯谷御前

ひとすぢに親をおもへる眞こゝろは
　　うたふこゑさへ世にたかくして　小町谷　里江子

春のあした雪いと面白くふりけるを
にほはれど花とも見ねてみそらより
　　ちりくるゆきのおもしろきかな　仝

四月兼題

五日
- 歌……花有遲速
- 文……小學校を卒業せし人におくる文

廿日
- 歌……惜花
- 文……山吹

きこはまるらす

一原稿はすべて、書きざま正しかるべし、文字のみだれたる、住所姓名のもれたるはとらず。

一兼題歌文は、ことに變体がなを用ひず、一字々々文明にしるさるべきこと、又歌一首の上に、上の句の中に二ところの漢字一字を用ひ他はみなかなを用ゐらるべし。

一必ず半紙を用ひて十六行、二十四字詰なるべきこと。

一毎紙、國郡、町村、番地、姓名等つばらかにしるさるべきこと。

一五日兼題は前月廿五日二十日のは、その月の十日までに本社にとゞくやう御送りのこと、遲れたるはとらず。

○女子。こゝにいへるは、紀内侍なり。阿佛の庭の訓に紀の内侍どのへ、とかゝれたるはこの人なり。紀伊といへるよびなの内侍なれど、かくはいへるなるべし。父は爲家卿にはあらず。夜の鶴も、庭の訓よりはさきにこの内侍にかきてれくられし書なり。

○あまた。數多。○ちかきほど。程近き、にて近所の。○女院。こゝのは新陽明門院をさせり。藤原の位子とて、深心院關白の女にて、龜山の院の妃なり。さて女院の號は圓融天皇の皇后東三條の院詮子にはじまり。門院の稱は一條天皇の皇后上東門院彰子に起れり。○さぶらひたまふ。仕ふるをいへり。さて侍ふといへる言葉のこゝろは、さは眞中などのさの如く、ろはりたるにて、ぶはもの音便。らひはりを延べたるなり。かくて、眞守るといふこゝろにて、傍にはべりて守る義なり。延る例は、語りを語らひ、はべりをはべらひといふが如し。○ひめの宮。龜山天皇の御子なれど宮とまをせり。○ひと所。ひとりのこゝろなり。ごは敬語なり。いにしへは神いく柱、皇子いく柱、ともかぞへ奉れり。宮と申すより一所ともかぞへ奉れるなるべし。○まことしき。實しき。○おとなしく。長しく。ろ

の女の宮の大人しくいらせらるればにて。おはすは敬語なり。○ついで。次手にて、いはきの音便。○はぐゝみおはす。はぐゝみ、は鳥などのわが子をつばさの羽のうちに含むる如く親の子をいつくしむさま。おはすは、育つることなり。○こまか。巨細。○ふるさと。故郷のことにて、わかうまれたる郷をもいひ、又としひさしく住みてやぶれたるいへをも、又わがうまれずとも、しはしすみて、たちはなれたる郷をもいへり。こゝなるはうまれたる里をいへり。○なでしこ。草花の名。○きこゑ。いひやりたるなり。○御かへり。御返事。○こまやか。情厚きこと。○とぞある。とは上の意のきれたるをうけたり、ぞはかゝりにてあるにて結びたり。

大意。女の子はおはせいはもたず、たゞ一人ばかりにて、この人はこの近隣にいらせらるゝ女院のもとに仕へてありとなり。すなはち紀の内侍をさせり。さてその院には女の御子一人生れたるたかりにて、何くれとこゝろくばりせらるゝが、信實なるさまにて、その女宮もおとなしくていらせるられば、今出立するにつけても、戀ひしと思ふ心のほどを、兼ねて宮のおんもとに申上ぐる序に、わ

が子の侍從爲相大夫爲守なども、わがたび立ちたる後にてよく面倒をかけてそだつべきことなどをこま〴〵と手紙にかきしたゝめてその終の奥に。なり。さてこゝのさまをかんがふるに阿佛尼も、しば〳〵この院にまゐりてこゝろやすくせられたりと見えたり。

君をこそ。云々、そなたをば朝日のやうにたのみにおもふなり。いまわがかく旅立つにつけては、今まで撫でいつくしみて育てたる子供をば、故郷にのこしおかんに、そなたより外には便るかたもなきものなれば、朝日の瞿麥にさゝずは、おく霜にかれはてんやうに、この子供も、面倒をかけてくれずは育つまじ。されば朝日の瞿麥をあたゝめてめぐむが如く、この子供をおほしそだてたまへ。となり。瞿麥に撫し子をいひかけたり。かくいひかけたることをば、文にも歌にも必ず假字にかくべき例なり。かくかきつけていひやりたるに、その御返事は最と濃やかにも憐れにもかきて、おこしたり。さてさきにいひやりたる返歌には、

思ひおく。云々、さやうに御心をとゞめて御出立なさらるゝからには、後にのこりたらん撫し子も霜のかゝりて枯るゝ如き難義はなくて、すく〳〵とそだつべ

けれど、安心したまへ。となり。かやうによみてかきつけてありたりとなり。女の子云々よりこゝまでは、紀の内侍にわかゝさまなり。

（十一）いつゝの子どものうた、殘りなくかきつゞけぬるも、かつはいとをこがましけれど、れやのこゝろよはあはれにればゆるまゝに、書あつめたり。さのみ心よわくてはいかゞとて、つれなくふりすてつ」。

○いつゝのこども。慶融、源承、紀の内侍、爲相、爲守の五人の子供をいへり。○殘りなく。のこらず。○かつ。さきて且つちる、などいひて、さくと見るほどに直ちに散るこゝろにて、こゝもかやうに書きつゞけながらも、かきをへてみれど今すぐにをこがましく又ればゆといふほどのこゝろなり。○いと。甚。○をこがまし。尾籠と相ひあたりて、びろうと書讀にもせり。嗚呼ともかけり。○まゝに。まに／＼、にて心にうち任せて。○さのみ。然ぞかり。○つれなく。強顔、にて情なく。○いかゞ。の下、あらんといふ程のことどをはぶけり。

大意。このつひによもよりしもこゝまで五人の子供のよみたる歌をみなゝがら殘らずこゝにかきつゞけながら、又おもへども甚だ尾籠がはしきことにて、人の目に

大學教授文學博士　黒川眞賴先生題
第一高等學校教授　落合直文先生閱
神宮皇學館教授　井上賴文先生述

竹取物語講義

全一冊

定價　金二十五錢　郵税　六錢

竹取物語の講義、また註釋の書類は、既に數種世に著はれたり。されど、或は高尚に過ぎ、或は簡略に失し、または、唯、一字一句の註釋のみに止まりて、初學者に充分なる滿足を與ふるもの少きが如し。弊店此處に見る所あり。今般、神宮皇學館教授、井上賴文先生に請ひて、此の講義錄を刊行せり。竹取物語を講究せんとせらるゝ諸君、もし一度、此の講義を繙きたまはゞ、座ながら師に就きて、口授を受くる感わらん。猶、此の講義が、如何に親切に、丁寧なるか、如何に初學者に便益を與ふるかは、乞ふ、一讀の上、其の特色を知りたまへ。

東京市京橋區南傳馬町一丁目十番地
發行　書肆　尚古堂　辻本九兵衛

三輪田眞佐子著

女子處世論

定價一冊金二十錢　郵税金四錢
本月二十日發賣　注文即日送本

三輪田女史の婦人教育に於ける十有餘年幾百千人一身を擧げて之に從事す其薫陶化導の良績實に女子教育社會の推重敬服する處なり曩に著されし女子の本分數版忽にして盡く此書更に女子處世の心得を説く着實温厚の趣旨に本づきて丁寧に其理義を反覆す凡そ國性を重じ國風を守り日進月歩の文明世界に處して日本婦人たるに背かざるの美德を全うせんと欲せらるゝの閨秀は實に之を繙讀せられざるべからず本書裝釘の優美なる女流歳暮新年の贈物として蓋最高尚適切のものなり

東京市築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
（電話番號一九四六）

女鑑第百五號目錄

(明治二十四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢
十二冊(半年分)	壹圓
全國無遞送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治二十九年三月十九日印刷
同　年三月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

Digitized by Google